

火の音

有森 信二

(一)

顔がない 割れた鏡のうちにもそとにも

この句の作者である北村透空が、私の高校時代の友人、北村秀夫であることを知ったのは、全く思いがけないことからであった。

私大の夜間部で、「近代詩歌」を担当している私は、虚子を講じるくだりで、「新傾向俳句」を提唱し、「自由律俳句」を確立した井泉水についても、虚子の「花鳥諷詠」との対照で、参考程度の紹介をしようと思いたった。

私の書架には、井泉水、山頭火、放哉といった自由律を代表する作家たちの句集や選書が、一時限の講義に当てるには十分な質、量ともにあるのだが、肝心の「S」という彼らの機関誌がなかった。

はたしてSは、現在も生きて在るのだろうか。明治四十四年創刊というから、生きて在るとすれば、もう八十数年の歴史を加えていることになる。新傾向、自由律ということばから受ける若さ、みずみずしさ、という印象と、この八十数年という歲月から思い起こされる老軀だとか年輪、だとかの印象との間の溝を埋めることができなくなった私は、Sの見本誌を取り寄せてみることにした。

ところが、その発行所の所在がわからない。井泉水、山頭火、放哉のいずれの書にも、Sの近況も、発行所のことも掲載されていない。

私の研究室に出入りするK書房の店員にも頼んでいたが、しばらく経って、もう発行されていないのではないか、という返事をよこしてきた。

そういうこともあって、結局、私はSなしで講義を終えてしまったのであるが、カルチャアばやりのこの頃、定型俳句がどこの教室でも、町や村の公民館でも行われているというなかで、Sという機関誌はこの荒波のなかに揉まれ、漕がれて、すでに風化してしまっただけで、いつか勝手にそう思い込んでしまっていた。

それから、一年も経った頃であつたらうか。地元の新聞社から、「現代文芸の展望」についての執筆依頼を受けた私は、机上の文芸年鑑を繰っているうち、ふと懐かしい文字に目をとめた。しかし最初、その文字がかつて私が探したSだということには気付かず、いつ

たん閉じた本を、あわてて繰り直したのだった。

いまをときめいている「青風」や「草土」という大結社誌の紹介記事と同じページにSはあって、しかもページの中央にあるのに、それはよほどの注意を払ってでも読まなければ、うっかり見落としでしましそうなたよりなさであるのだった。

まさしく明治四十四年創刊とある。通巻も八百号を超えている。八百号を数える誌というのは、他には「ホトトギス」ぐらいのものである。しかし、会員数三百名というのは、首都圏に発行所をもつ結社誌としては、あまりにも少ない。

「あった」

という喜びが湧かないのは、会員数の少なさのためにもよるが、ひよんなどころからSの出自が割れたという理由にもよる。

なんのことはない。いつも背にしている書架の、一番手近な位置にある文芸年鑑のなかにSはとうの昔からあって、私を見下ろしていたということになる。

とにかく私は、発行所あてに見本誌を請求することにした。

商業誌に、「幽玄美を徹底追求。見本誌千五百円」などと派手な広告を掲載している定型誌と違って、肝心なことにはなに一つ説明していないSであるから、不安ではあったが、二千円に、返信用切手を同封して速達で送った。

しかし、見本誌はなかなか届かなかった。十日経ち、半月が経った。草土は、五日目に真新しいインクの匂いを満載して届いたし、青風などは、きらびやかな誌面を一週間目には送り届けてきた。

やはり、K書房の店員のいうとおり、現実にはすでに存在しないのではなからうか。それとも、私みたいな市井人には、見本誌を送るという、低俗な方法はとらない主義なのであろうか。などと半ばあきらめ始めた矢先、門扉にゆわえつけた郵便受のなかに、ひっそりと落ちていたSを発見した。

まるで薄っぺらな習字の教本。なにか間違って投函された、宗教関係のあやし気なパンフレット。Sを手にした私の第一印象はこうだった。そんなイメージを起こさせるに十分なほど、Sは薄く、小さく、地味であった。

おまけに、二冊が同封されていて、その二冊を合わせてさえ指先にこころもとない。

ところが、淡い墨蹟が刷られただけの粗末な装丁の表紙をめくった途端、私の気持は驚嘆に変わった。いきなり、巻頭句が錐の鋭さで私を貫いた。

狂女不気味に笑う焦点になんにもない

久二

目まいを感じた。腹にズシンと鉛の玉でもぶち込まれたみたいに息が詰まった。狂女のまなこにとらえられた自分が、ぜんまいの「の」の字の渦に巻き込まれ、底知れずひきずり込まれていくようだ。

私は、平衡を失いかけた体を、あやういところで傍の肘掛け椅子に沈めると、二枚、三枚とページを繰っていった。

折詰の鯛の歯冷たく忘れた言葉探している 翠壺洞

美しいけもの罨に陥ち枯野雪降る 同

このあたりになると、ことばというものが、いかにすぐれた武器であり、いかに陥穽に満ちた存在であるかを突きつけてくれる。「夏草や兵どもが夢のあと」や、「万緑や死は一弾を以て足る」などと比べても、少しも遜色を感じない。

私は、かつてない異様な興奮に包まれたまま読み進んでいたが、このSのなかではあまり評価されていないのであろう、次の一句だけ作者の句の前で立ち止まってしまった。

石畳踏めばかんかんと死者の手が伸びてくる

北村透空とある。これはどういう光景を意味するのだろうか。無人の石畳を歩いていく人の背後から、死者の白い手がサツサツと伸びる。そんな情景なのであろうか。それとも、死というものにいついどみかかられるかshれない人間というもののあやうさを、暗喩のうちに語っているのであろうか。

私は一冊目を閉じ、急いで二冊目を開いた。またしても北村透空は、最後尾に近い位置にあり、今度は二句が選ばれている。

鳩の目に血の風光らせ爆心地嘘のない広さもつ

鳩赤い胸のうちをぶら下げたまま時間の真円を歩く

被爆者なのであろうか。被爆者の鬱屈とした怒りを句に託したのであろうか。

そう考えると、一冊目の「石畳」の句とつながってくる。作者自身石畳に群がる鳩に託して、いや鳩そのものであって、死者たちの声を乾いた空に放とうとしているのかもしれない。私には、赤く血走った目をもつ鳩の群れが、低く飛んではまた元の同じ円のなかに舞い戻ってこざるを得ない、哀しい性をもつ死者たちそのものの

姿なのではないかとも思えて、思わず膝を叩いたのである。

早速私は、Sに定期購読の申し込みをすることと、北村透空という人物をさしつかえのない範囲で教えて欲しいという意味の手紙を書いて投函した。

いまになって思えば、私が北村透空について描いたイメージは、広島か長崎かの原爆病院に入院中の老人で、世間から隔離された体と心の痛みをただ一条の句によって癒している、というものだった。であるのなら、その老人は、狭い檻のなかから明るい光のなかに解放されなければならぬ。私は、そう考えた。

つまり、学者の、埋もれたものを世に出さねばならないという使命と、あわよくば北村透空とともに自分が世に出ようという功利とが、同時に私の意識の底で働いたのだった。

Sの発行所からは、見本誌のときに似ず、意外な早さで刷り上がったばかりの新しいSと、一枚のハガキが送られてきた。

ハガキには、〈入会を歓迎します。秀句を期待しております〉という通りいっぺんのあいさつの後に、〈北村透空氏。本名、秀夫。現住所、F市城北区〉とあり、電話番号まで書き添えられている。なんとということであろう。同じF市である。

おまけに城北区といえ、私の住んでいる北区とは隣の区になる。しかも、つい一年前まではどちらも北区であった。F市のベッドタウンである北区の人口が急激に増加したため、三つに分区したのであるが、北区と城北区とはもともと同じ生活圏にあり、分区したからといって、生活の利便は以前と変わったわけではない。

すると、北村透空とは知らないうちに本屋の店先ですれ違ったり、国立病院下の公園のベンチで一緒だったりのかもしれない。

本名は北村秀夫とある。北村秀夫という名前なら他にも知っている。知っているどころではない。郷里の高校で、北村秀夫はトップを続けた。私は、三年間一度も秀夫を抜くことができなかった。

その北村秀夫は東京の外語大に進み、私は地元のK大の国文科に入った。

私はなんとか六年もかかって卒業し、二年間の修士課程を経たあと、指導教官であった義父のはからいで市内の私大の講師をしている。義父にいわせれば、もう少し私に時代を先取りする気概があったら、K大の講師も夢ではなかった、ということになる。

北村は、当時新左翼といわれた一派に加わったと聞いているが、その後は知らない。

もちろんこの北村は、被爆者でも被爆二世でもない。まして、俳句をやるなどという男ではない。国文に進むという私に、「いまにも苔の生えちまいそうな、そんなところがお前らしいな。しかし、こ

れからはなあ、視野を世界に広くもたなきや駄目だ」というのが口ぐせで、北村自身は希望する英米語学科に進んだのだった。

私は、自分の奇妙な考えに気付いて笑い出したくなかった。北村透空と、友人の北村秀夫とが重なり合う筈がない。その要素もない。透空は被爆老人、友人の秀夫はいまは外交官か、外信部の記者といったところである。

しかし、そんなことはどうでもよい。北村透空と私とが世に出るかもしれないチャンスである。しかも、隣り合わせの区に住むという。取材をするにしても、病院に見舞うにしても、目と鼻の先である。義父や妻の手前もある。この仕事は、成功させなければならぬ。いや、必ず成功する。そう直感した。

新しいSを開いてみる。透空はやはり五十人ばかりの作者の最後から四番目にあつて、二句が入っている。

踏切のむこうに冬の火花がカラリと上がった

ハンカチ落ちている夜の線路をまたぐ

以前の三句に比べ、少しトーンが落ちているように思うのは、私の偏見であろうか。それにしても、ハンカチの句を選者が初めて採り上げ、「ハンカチの白さを浮かび上がらせている。作者はよくものを見ている」と簡単に触れている。

とにかく私は、北村透空に電話を入れてみることにした。

恐らく、Sの誌友の誰からも注目されていないと思っただけでも知らせておく必要がある。ハンカチの句にしたって、ハンカチの白さだけを詠ったのではないと私には感じられる。夜の線路にハンカチを置くことで、作者は己れを線路の上に横たえたつもりなのではないだろうか。そして、蒼ざめて横たわった己れの上を、疲れ果てた透空自身がまたぐ。これが選者のように、単なる美と観察の好悪とでいい切ってしまうなら、この作者を見誤ってしまうことになるかもしれない、と私には思えるのである。

「木下です」

か細い女の声が出た。

「北村さんのお宅じゃありませんか」

「木下ですが」

ダイヤルを間違えたのだ、と思つた。

「ごめんなさい。お宅に、北村透空さんという方がいらっしやるかと思つたものですから」

間違い電話の口実のために、透空の名前を出して切ろうとした。
「少し、お待ちください」

意外だった。女は、いくらかためらいに似た声を残して引っ込んだ。やわらかい布の上にも受話器を置いたのか、耳のなががる急にひっそりと静まりかえってしまう。そのままなんの応答もない。
「もしもし」

スー、スーと、なにかが向こう側に抜け落ちていくのではないかと
いうたよりなさが感じられる。

「もしもし、もしもし」

受話器を耳の傍で振ってみた。そうしていると、接触の悪い途中の線がうまい具合につながって、いま呼んでますから、とでもいい出すのではないかと思うのだが、そんなふうでもない。

「もしもし、もしもし」

「私ですが」

男のしやがれ声が、いきなり出てきた。

「北村透空さん、いえ秀夫さんですね。石畳の句をSに発表なさった北村さんでしょう」

「はあ」

「すばらしいと思います。いつもSを購読している者ですが、先々月号の、あの『かんかんと死者の手が伸びてくる』というところがなんともいえません。その次の、『鳩赤い胸のうちをぶら下げたまま』というのもいいですね」

「あなたは」

男は、面倒くさそうにいった。不意の闖入者として訪ねることの多い私は、この手の無愛想な応対には慣れている。

「失礼しました。私はF大の講師をしております、橘浩一というものです」

「夕チバナ、コウイチ」

「ええ、近代詩歌というのを担当しております、有能な現代作家のレポートをしようと思っっている者です」

私は、有能な、というところに力を込めた。相手は寝たり起きたりの老人である。この場合、自分が大学の講師であることと、その目がとらえた〈才能〉であるということを強調する必要がある。私は、いくらか饒舌になり始めた自分に気付いている。

「今回はいろいろのジャンルのなかから、特に俳句界における俊秀をレポートするという目的でいくつかの結社誌を探しているうち、あなたを発見したのです」

「俊秀」

「そうです、あなたには光るものを感じます。いままでの作品にはない、新鮮さと苦渋の入り混じったシャープでナイーブな主張があ

ります。とても永年ベッドに起き伏ししている人の作品とは思われ
ません」

「ベッドに起き伏ししている」

「ええ、数十年の間、多分寝たり起きたりでいらっしやる」

「ハア、こいつは面白い」

突然、男は腹の底から声をしゃくり上げ、笑い出した。

「これはみごとな推理だ、なあコーイチ」

「コーイチ」

あつ、と私は叫んだ。足元をいきなりすくわれた。思わず、顔中
に血がのぼった。

「お前、浩一だろう、長浜の」

長浜とは、私が生まれた村の字の名である。

「お前が浩一だつてのはすぐにわかつたぜ。妙にとり澄ました声を
出しよつて、なに、俺が俊秀、まいったぜ、全く」

秀夫は、急にぞんざいな口調になった。時折咳払いをまじえるし
やがれた声音は、以前の秀夫の滑らかだった声とは全然異なってい
るのだが、語尾をいく分切り上げる独特の口調には、確かに聞き覚
えがある。

二十年の距離が、にわかに触れば届きそうな間近に舞い下りて
きた。

(二)

雨が降り続けている。堀端の柳の並木が一樣に首を垂れ、雨に煙
っている。青い藻の生い茂った堀の水面には、波紋にならない雨粒
が、自分の大きさの分だけふくらんでは次々と吸い込まれていく。

目の前の国道を、勤務を終えたマイカーの列がひっきりなしに過
ぎる。東の都心部に向かう車の数はまばらであるが、西の郊外に急
ぐ車は、車線を奪い合い、水を蹴散らして進む。いつもの時間の五
時半といえば、まだ真昼の明るさであるのに、いまはもう暗幕のロ
ープを引き締めてしまう寸前かと思わせるほどに薄暗い。そのせい
か、すでにどの車もライトを灯していて、その光のおぼつかない赤
さが、右に寄ったり左に折れたりする度に心を急がせる。

私は、三本目のセブンスターに火を点けた。一口、二口大きく吸
い込んで、そのいがらっぽい煙を窓ガラスに吹きつける。雨に濡れ
たガラスに煙の束がぶつかると、どういふ加減か、流れ落ちる雨の
糸が一瞬遠く揺らいで、「M・H」という細い指の文字がぼんやり浮
かび上がってくる。

恐らく、女の小指の文字なのだろう。

人を待つ女が、この椅子に座って恋人のイニシャルでもなぞって

みたのであろうか。「橋本」とか「浜田」とかいう男の名前を小さくつぶやきながら、いつまで待っても現われないその男の仕打ちに、唇をかみしめていたのかもしれない。

秀夫は、現われない。五時の約束が三十分も超過している。秀夫は、四時までには体が空くから、どんなに遅くても五時には間に合うといった。堀端の「ミレー」という喫茶店を指定したのも秀夫であった。かけもちの昼間部の講義が四時四十分までだから、少し遅れるかもしれないという私に、「心配するな、先に来て待ってるよ」といった。

最初、秀夫は、私と会うのを避けたい口ぶりだった。「冗談じゃねえよ、今更学者先生なんかに用事なんぞあるものか」秀夫がそういったとき、すぐ間近で赤ん坊の泣き声があった。が、すぐに止んだ。口元にハンカチでも押し当てられたのか、「ウツ」といううめきを残し、止んだ。

「これ以上切り刻まれたって、なあんにもでてきやしないぜ」

秀夫は、大学を三年で中退したのだといった。いや、除籍というやつかな、と笑った。

私の胸の内には、透空と一緒に世に出ようという野心などなく、二十年ぶりの秀夫との対面だけをなんとか実現したい、というそれだけの気持があった。

「しゃあねえ、それなら俺にもお前を見込んで頼みたいことがある。来週の水曜日はどうだ」

水曜日だったら大阪から帰ってこれるという。秀夫の話では、生鮮ものをF市から大阪に運び、大阪からは衣類や電気製品や雑貨を持ち帰る仕事をしており、三月や四月の転勤のシーズンには、引越し用のコンテナを積んで、東京や千葉あたりまで出かけることもある、といていた。

この雨のことだ。予期しない渋滞にでもかかって、難渋しているのではないだろうか。そうだとすれば、私との約束の時間を気にしながら、イライラとハンドルを握りしめているのかもしれない。それならもういいのだ、と思ってしまう。

外語大と運転手という、どう考えても一致しない職業を選んだ秀夫の前に、まがりなりにも教師という肩書をもった私が出る。秀夫にとって面白がるう筈がない。どうしてあのかのとき、この二人の立場の違いに気付かなかったのか、といまになって後悔する。もちろん、職業に差などある筈がない。しかし、秀夫と私とは、まがりなりにもライバルだったのだ。

秀夫は、いつもトップにいなければ気の済まない男だった。特に、英語は抜群だった。高校の二年、三年と、県下の英語弁論大会で連

続優勝するという実績を重ねていたし、模試でも九十点を下るといふことはなかった。将来は、外語大を出て外交官になるか、マスコミの外信部に入るといつていた。それに、理数系にも利いていて、惑星の観察をするといつては、理科室から天体望遠鏡を持ち出し、放課後の屋上に四、五人の仲間を集めたりしていた。

私の方は、人気のない公園の隅などに建てられた句碑や歌碑を巡るのが好きで、大学に入ったら、啄木と牧水の足跡をたどってみようと思つていた。

そんな二人に共通しているのは、どちらも農家の長男であるといふことだった。家に帰れば、学期試験の最中であっても、田植えも穫り入れもし、疲れてしびれる頭で、明け方まで予習や復習をしなければならぬのだった。

いつの間にか、闇が下りてしまつていく。

淡い水銀灯の光が、その闇の色を、ぼつりぼつりと開いた穴の内側から覗いてみせる。闇の色は漆黒ではない。雨を含んだ群青色をしている。その群青色が、ゆっくり斜めになだれていく。

時計の針は、もう七時のあたりを指そうとしている。車の列もめつきり少なくなつた。時折、思い出したみたいにわかになだれてくる。迫つてきて、ガラス窓を貫いたと思うと、すぐに闇の色にまぎれてしまう。

「これでいい」

私の胸の内には、待つたという疲れはない。はぐらかされたという怒りもない。北村秀夫ではなく、北村透空の月々の作品を、一人のファンとして静かに眺めていければいい。そうすることの方が、「ヒデオ」に対する、かつてのライバルとしての友情の表現になる。

そう考えると、私の心は波立たなくなつた。

もともと、会つてみたつてこれという目算のあることではない。現代作家のレポートの話にしても、秀夫は興味本位で報道されたり、必要以上に評価されたりすることには見向きもしないだろう。自由律という俳句界における異端派の、しかも会員数がわずかに三百人というSに所属するということ自体が、そういう日向の世界を自ら拒絶する、という姿勢を明白に示しているのではないかと思える。

そんな秀夫に会うより、作品は作品として、客観的な目で透空を見た方がどれだけいいかしかない。少なくともこの二十年という間、別々の道を歩いてきた秀夫の過去をさぐることによつて、透空の緊張の糸が切れてしまうことだつてあり得ないことはない。

現に私は、マスコミや学者たちが、有為な新進作家の工房をあばいてしまつたがために、よりどころを失い、墜ちていった幾人かを知っている。

私は、膝にこぼれたセブンスターのちりを払い、計算書をつかんで立ち上がった。シヨルダーバッグのひもを二重に折ってぶら下げ、「M・H」に手を振った。

そのとき、背後から、しゃがれ声が長靴の音と一緒におおいかぶさってきた。

「待たせたな」

見知らぬ男が立っている。私は振り返った途端、そう思った。

男の左顔面には顔がない。いや、顔ではない、というべきか。頬から眉間にかけてだいたい色に光る皮膚が引きつれ、唇の端をめぐれ上がらせている。眉毛を失った左の目は、突き出したこぶの肉のなかに細く埋もれている。

「俺だ、俺だ」

男は、欠けた前歯の間から舌を突き出す仕草をして、首を傾けた。が、いきなり喉仏をひくつかせて笑い出した。

「そうだよな。こりゃあ無理もねえ」

男は喉の奥まで見せて笑ったあと、急に真剣な表情になって、「どうだ、こうしたらちったあわかるか」と、口元を引き結び、目をじつと私の視線のなかにすえた。私は、け圧される思いで男の顔を見詰めているうち、二十年前の北村秀夫の輪郭が、ちようど写真のネガをかぶせるという心もとなさで、かろうじてその右半分に重なってくるのを覚えた。

「どうだ」

「ヒデオ」

私の唇からは、空気の音が洩れただけで、声にはならなかった。

「久しぶりだな」

秀夫は、ニヤリと笑った。

「呼び出したりして、悪かったよ」

私は、やつとそれだけいった。自分のことばが、自分のものとは思えない。傷ついた哀れな禽獣を見下ろすという立場に急に立たされた自分の心の動転を、秀夫の目に見透かされている。

「すっかり遅れちまった。出がけに、子供がひきつけを起こしやがったもんでな」

「あの赤ん坊」

「俺の子じゃねえよ」

秀夫は乱暴に音をたてて椅子を引くと、横座りに腰を沈めた。私も、また元の椅子の端に腰を落とす。歳の割にはなめらかな秀夫の右顔面が、目の前にある。

「俺はガキなんか産ませねえ。俺みたいなの奴は俺でおしまいだ。がまんができねえよ。俺に似た奴が俺みたいなのどまな醜態さらして、

あつちい転んだりこつちい転んだりするなんてのは」

「優しいんだな」

「いいかけて、私はずい分無責任ない方だ、と口を噤んだ。

「許せねえんだ。俺とそつくりの、俺でない奴がこの世にいるってことがな。もつとも、あいつは俺の子なんかじゃない」

秀夫はそう吐き捨てる、水を運んできた娘に「超特急でだ」とビールを注文した。

「だけどな、そんなことはいい。どうでもいいさ。俺の知ったことじゃない。俺なんざ、第一、自分一人のことさえ始末に終えねえ」

ライバルだった頃の秀夫は、こんなことはいわなかった。

「あきらめたさ。くよくよ考えても始まらない。これ以上、どこに逃げ込むところがある」

「逃げ込む」

「追われている。朝から晩まで、な」

いい終わらないうちに、突然、秀夫は私の背後に鋭い目線を送った。しかし、すぐに元の顔に戻ると、「どうかしたのか」と訊く私に、

「十五年も逃げ続けている。とにかく疲れたぜ。早いとこふん捕まえてくれ、といたたくもなる。本当は、もうどうでもいい。未練はないのさ。それでも逃げている」

と、薄笑いを浮かべた左頬でいう。

私は、秀夫の顔をまともに見ることができない。痩せて尖った鼻梁を境に、右と左とに別れてしまった顔面に、秀夫の心の断層を見る思いがする。

「しかし、アホらしいと思ったらないぜ。ふん捕まって、ブタ箱に放り込まれて、それからまだ何年も生きていなくちゃならない。ふん、自分のことぐらい自分で始末してやるさ。それがだ、よくよく因業にできてるらしい。まだ決着がつかんのだ」

「決着をつける」

「五回目かな、いやいや六回目かな」

秀夫は、ジャンパーの袖を乱暴にまくると、骨ばった両手首をむき出しにした。

「こんなことで、くたばれるわけもねえんだけどな」

秀夫は、ささくれた爪の先で手首の傷あとをつついてみせる。五センチぐらいの薄く細いのもあれば、斜めに太く弧をなした傷もある。

「同じことばかりやらかしてる。睡眠薬とか、首をくくるとか、他にいくらでもやり方はあるかと普段はそう思うんだ。でもな、いざとなるとこれしかない。だらしがねえんだよ」

秀夫は、だいだい色に光る頬に、いま手首の傷を搔いたばかりの爪をたててバリバリ音をたてる。頬に幾条もの血の色が現われる。

みるみるその条が、厚く太く盛り上がってくる。表皮が破れて、うっすらと血がにじみ出した条もある。

私は、思いがけない成り行きに、ことばを失ってしまった。仕事柄私は、幾人ものいろいろな階層の人物と初対面のインタビュや対談をすることがあるが、いつも必ず一定の距離をおいた安全圏にいて、あくまで客観対象として応対をする。また、そういう技術をものにしていっている。

「夜の国道をぶつとばしてる最中にな、ナイフでスウツとやる。そうしたらだんだん気が遠くなつてさ、エンジンの音がいまだ、いまだぞつと叫び始める」

秀夫は、私のコップに先にビールを注いでおいて、自分のコップにも手酌で注ぐと、一息にすすり込んだ。そして、右手に抱えている瓶から二杯目を注ぐと、「もう二本くれ」といって、また一気に空けてしまった。

「君の句に『線路をまたぐ』ってのがあったな」

話題を変えるつもりだった。

「そうよ、線路なんかお構いなしさ。百二十キロだぞ。時速百二十キロ。沿道の灯が火の玉となってふくらんだり、縮んだりする。ざまあみろだ」

秀夫の左顔面が赤く火照って、ひくついている。右顔面は青白く黙り込んでいるのに、左顔面だけが肉汁の色を帯びてせり出している。

「なるようになるさ」

秀夫は、何度も同じことばを繰り返す。そして、「なあに、心配するな」と、酒臭い息を私の耳元に吐きかける。私の肩には、秀夫の上背がもたれかかっているのに、たいした重さを感じない。骨組みだけのあやつり人形を抱いているのにも似た心もとなさがある。

二軒目のスナックを出るとき、「今日はもうよそよ」というと、秀夫は「俺のいきつけがある。もう一軒だけつき合え」と頑強に首を振った。

秀夫は、ふらつく足元を降り続けている雨に濡らしながら、泳がせていく。ガクンと時折膝が折れる。その度に私も二、三步よろめいて、雨の粒をしたたか全身に浴びてしまう。

「エンゼルっていうんだ。へへ、エンゼルだぜ、嫌味な名前じゃないか。でも、れい子だけはピカ一だぜ。あいつだけは違う。そいつに会わせてやるよ」

秀夫は、濡れた掌で顔面をしきりにぬぐう。右半分の皮膚を左半分押し転がすという仕種で、手荒にこする。もう何年もまともに散髪をしていないとみえる髪が、乱れて左頬に貼りついている。

時計は、まだ十時を少しまわったばかりである。秀夫の酔いの割には、たいして時間は経っていない。なにしろ、秀夫のピッチの早さといったらすごい。最初のミレーでビールを五本、次のスナックで水割りや七杯。つき出しもなにも口にせず、ひたすら飲んでいる。「違う、違う、そんなけちなところじゃない」

秀夫は、歓楽街の入口から真つすぐに入ろうとする私を、狭い路地の方にひっぱった。

「こんなガサついたところで酒が飲めるか。薄汚ねえ女の尻を撫でながら、ちびちびウイスキーをなめるなんて奴の気がしれん」

と怒鳴っておいて、

「浩一、お前もそっちの口だろう。わかっとる、わかっとるさ、無理するな。俺は、お前の尻の落ち着き先まで干渉はしねえ。そんな下世話じゃねえんだ、この秀夫さまはな。しかし、れい子だけはピカ一だぜ」

と私の肩を力まかせに叩いて、ウンと一人でうなづく。私は、秀夫のいった「追われている」ということと、肝心の透空のことをまだ聞かないままなのが心の隅にかかって、頭のどこかが奇妙に酔えないでいる。「あの話だが」と、秀夫の話の切れ間に幾度か試みてみようとした。しかし、左頬の傷に、新しいメスを入れる思いで、口元まで出かかったことばを呑み込んでしまう。それにしても、何者かに、本当にうしろからつきまとわれている気配を感じ、思わず秀夫を私の斜め前に押しやる格好になる。

秀夫は、私の傘の下を抜け出て、川沿いの道を先にたって歩くと、「こっちだ、こっちだ」と手招いた。

追いかけていくと、ビルの倉庫の一隅に、「エンゼル」と赤い小さなランプが灯っている。一人がやっとくぐっていけそうな階段が、暗がりに沈んでいる。

秀夫は、長靴に溜まった水をアスファルトに空け、よく足に収まらない靴底のふがふがした音のまま、その暗がりに躍り込んでいった。私も、袖や膝にふりかかった雨粒を軽く払って、秀夫の背中に続いていく。

「いらっしやい」

思ったほどは暗くないライトの下に、タンクトップの娘がいて明るい声をあげた。

いきなり強烈なロックビートの曲にでも弾かれるのではないかと思っていたのに、意外な静けさで、空気も澱んでいない。十脚ほどのカウンターの端でママさんらしい女性と笑い合っており、一つのテーブルでは、学生らしい三人がテレビゲームをやっている。

「木下さん、帰ってらしたの」

タンクトップの娘が、秀夫の顔を真つすぐに見て微笑んだ。木下ではない北村ではないか、と私が思い、ああ秀夫は追われているのだったと考えていると、秀夫が「今朝な、今朝ターミナル到着さ」と大声で答える。

「お疲れさま」

「大丈夫、慣れちまったよ。それより、れい子の方こそどうだ」
「すっかり元気。あら、こんなに濡れちまって」

れい子と呼ばれた娘は、刺繍のついたハンカチをポケットから取り出すと、秀夫の額から頬、首筋へと軽く指先で叩いていく。秀夫は、腕組みをした肘をカウンターに落とし、少し顎を突き出した格好のまま、されるにまかせている。いままでの酔態はどこにいったのか、背筋もしゃんと伸ばしている。

「こちら、お友達」

「ああ、高校時代の秀才で、二十年ぶりに会った。いま、大学の講師をしている」

「あら、K大の」

「いや」

といいかけようとしたら、秀夫が「M女子大だった、な。生理学の権威だ」と、でまかせをいう。

「うわあ、あこがれてしまう。私、M女子大に入るのが夢だったときがあるんです。これでもね、英語得意なんだから」

指をパチンと鳴らす。すぼめた唇が、新鮮な果実の歯ざわりを感じさせる。

「私、清水れい子というんです。文理学部だったら、池田恵子って二回生ご存じありません」

私を知る筈もない。

「なにしろ、その、学科や専攻が違えば、教師の方も全然会うことがない。四年間、一回も教えない学生がたくさんいる。でも、池田恵子ってどこかで聞いたことがあるなあ」

私は、れい子の気をそらすまいとして、M女子大の講師になる。「彼女中学、高校の親友で、大学に入ったあともずっと友達だった。このお店にもよくきてたんです。色の白い娘で、スポーツだったらなんでもOK。テニス、バドミントン、水泳、なんでもうまいし、それに詩なんか書いてる」

実際、そんな娘がいたかもしれないという気がする。

「恵子ね、でも学校辞めちゃった」

「辞めた」

「ええ、二百年も続いたという家具の卸問屋だった実家が倒産したんです。赤いワーゲンも、マンションも売り払って田舎に帰ってしまった」

「ほう」

「かわいそうだったわ。見てられなかった。華やかだった恵子が、ある日突然みんなの前から消えなくちゃいけない心境、痛いほどわかる。ご存じありません」

「気が付かなかった。なにしろ、決して多くはないんだが、これでも千人からの学生がいるんだからね」

れい子は、いく分がっかりした表情になった。よく動く瞳が、壁のカレンダーのあたりでふと止まり、なにかを数えるふうにかすかに揺れた。でもすぐに、「どこにでもある話ですよね」と、笑顔になった。私は、こんなことならもつとしっかりM女子大の講師になるのだった、と後悔する。

「やけに意気投合しちゃったな」

秀夫が、くしゃくしゃのハイライトに火を点けながら、くぐもつた声でいった。

「あら、ごめんなさい」

れい子があわててマッチを擦ろうとしたが、いいんだと秀夫が手を振った。

「俺に気いつかうな。いいんだよ、続けるよ。こいつの話聞いてやってくれ。こいつは俺を憐れんでるんだ。憐れんで、コチコチになっちまってる」

秀夫は、めくれ上がった唇の隙間から、太い煙をカウンターに吐いた。煙は、硬いカウンターに激しくぶつかり、はねかえって秀夫の胸のあたりまで渦巻いてのぼる。

「憐れんでなどいるもんか」

私は、秀夫の肩を揺すった。体と頭とが、たがい違いの方向に大きく揺れる。

「ああ、ああ、そうそう、お前は憐れんでなどいないのさ。しかし、だな、俺にはわかるぞ。お前は俺を、どうしようもねえ臆病者の半端者だと思ってる」

「そんなことはない」

「むきになるなよ。実際、俺は半端者だ。なっちゃあいない。くだらんよ。挫折中退の、A級戦犯の、くたばりぞこないの、能なしさ。なあ、れい子、そのとおりだろう」

「また、いつもの口癖ね」

れい子は笑いながら、空になった二つのコップを並べ、ボトルを逆さまに振っている。

「でも、その半端者の人に命を救われたのは、どこの誰よ」

「そいつは、俺にも責任のあることだからな。責任、アハア、俺にもまだ人並みな口がきけるとみえる。とにかく、れい子にだけは誰にも指一本触れさせやしねえ」

秀夫が咳き込むと、れい子は、「そうね」とうなずき、「ああ、終わっちゃった。一本出しとこうかしら」とうしろ向きになる。

「だったら、そのボトルはぼくがもらうよ」

れい子が椅子に乗り、伸び上がって棚のウイスキーに手を伸ばそうとするのを見て、私があった。そして、黒いボトルを抱えて立つれい子に、胸の財布から抜いた金をわたそうとしたときだった。

「ふざけるんじゃない」

いきなり、横面に平手打ちがとんできた。腰を浮かし加減に伸び切った姿勢になっていた私は、その衝撃をまともに食らって、仰向けに背中から土間にひっくり返った。

女の悲鳴があがる。いったんはね上がって、ゆっくりと落ちてくるコップや皿や、コップにまつわりついている水や氷が、宙に静止している。

一瞬、なにが起こったのかわからなかった。私は、ぼんやり足を投げ出したまま、濡れた土間に腰を落としている。

誰かが急いで駆け寄る音がする。

「この野郎、なめた真似しやがって。貴様、俺をどこまでこけにしやがる」

あざらしに似た男が叫んでいる。見知らぬ男が、仁王立ちに私を見下ろしている。

「甘ったれるんじゃないぜ。ふん、なにが生理学の権威だ、なにが俊秀だ。ちきしよう。おい、こいつを外におっぼり出せ」

私には、ことの次第がのみこめない。床に転がされているのが私で、髪を振り乱して叫んでいるのが秀夫であるとは、納得がいかない。

「やめて、お願い、研次、やめて」

秀夫の腕にれい子がからみつき、もつれ合って二人がテーブルに倒れ込んだ。

「どうしたっていうの、いったい、木下さん」

れい子の声の後に、中年の女のひきつった声が続く。私は、れい子のいった「ケンジ」ということばが妙な具合に頭の隅にこびりついて、染みの浮き出た天井をぼんやり見上げている。

(三)

私は、書斎にしている二階の六畳の間に、届けられたばかりのSの封筒をぶら下げて上がった。

エンゼルでのことからもう二週間が経つというのに、まだ腰骨に痛みが残っている。立っているときはさほどでもないのだが、椅子

に座るときなどは、しばらく息が止まりそうなほどの苦痛に耐えなければならぬ。

それにしても、あの晩の秀夫のことがわからない。私がボトルを買おうとしたことで、秀夫の逆鱗に触れたということは考えられるのだが、ただ金を出すとということだけでいえば、一軒目のミレーも、二軒目のスナックも私が支払いを済ませたのである。エンゼルにしたって、私が無理に秀夫を呼び出したあの日のいきさつからみれば、当然のことと思つて不思議ではない。

確かに私は、秀夫の現われように驚いた。二十年という歳月のしわざを、あ然と二人の身の上にひき比べてみた。「追われている」、「なるようになる」という秀夫のことばの裏を、探りたいという気にもなつていた。しかし、秀夫を半端者だとは思つてもみない。秀夫を思うより先に、私自身が一人前だなどは考えたこともない。れい子という娘に関わりがあるのかもしれない。れい子の前で、私が秀夫の耐えられない仕打ちをなにかしでかしたというのだろうか。

秀夫は酔つていた。すごいペースでビールを、ウイスキーを飲んで、激しく私に食つてかかった。

だから、あのことは、酩酊による一時的な感情の爆発であつただけなのかもしれない。それより、あの右と左とに別れた顔面の異様さが気にかかる。あれだけの傷を負つた秀夫の、胸のうちの煩悶と屈折はどうであろう。二十年前の秀夫は、純朴で明るい、すばらしく頭の切れる男だつた。

腰を落としてしばらく息を止めてみると、ようやく痛みが去つていく。痛みが去つたあとは、溜めていた息を一つ、二つとといった要領でゆっくり吐き、肘掛け椅子の背もたれに徐々に体重を移していく。そうして、机の端に置いたままのSに手を伸ばした。

Sは、あいかわらず四十ページという薄さである。編集後記に目を落とすと、〈総合雑誌における自由律俳句の除外は、とりわけここ数年の俳句界における動向と期を一にするように〉という少々ひがみっぽい書き出しで始まり、〈これはまさに、時代の趨勢におもねる経営姿勢の表われである。わがSは、ともすれば浮薄に陥りやすいこの時代の本質を見失わず、各自がしっかりと作句姿勢を持ち、切磋琢磨していくことが必要である〉と結んである。

これは、圧倒的な質量を誇る定型俳句の隆盛と、総合雑誌からの自由律俳句の締め出しというかなり政治臭の強い事件が、Sの編集子を危機感に陥し入れ、こういつたある意味ではひらきなおつた文章にさせるのだとうなずきながら、私はうしろの方からページを繰っていく。

透空の句は、やはり最後尾に近いところに、申し訳程度に二つ並んでいる。

孤絶の月をかかげ蒼い島である

俺にもくれた広告を黙って捨てる

一句目には、選者の評がある。良くない句の例として、この句がひき合いに出されている。「孤絶」などという気負った造語は避けたいがよい。力んで伸び切ったことばを並べることと、ことばを選ぶということとは同義語ではない。気負ったことばが、みずみずしい感動をしばしば平板なものにしてしまう」とある。

私は、秀夫がこの評をどのような気持で読むのだろうかと考え。恐らくは、秀夫はこの評を認めないのではないだろうか。「『感動』などということばで体裁をつくりやがってなんになる。俺の気持など、わかるもんか」と叫ぶ、秀夫のしゃがれ声が聞こえてきそうである。

それにしても、この雑詠欄には十句を投句することになっているのに、私がこれまでに見たかぎりでは、透空の句は二句より多く掲載されたことはない。日の目をみることのなかった残りの八句の、黒々とした呻吟のさまを見る思いである。

こともあろうに、その透空を、私が発掘しようなどという挙に出た。私が秀夫の立場であったとしても、無遠慮に踏み込んでくる奴の横っ面ぐらいは、はりとばしたかもしれない。いや、むしろ無神経な男ぐらいだったら許せても、味方面をして現われる奴など、殺してしまいたくなるかもしれない。

新聞社から依頼されている一回目のレポートの締め切りが迫っている。この分だと、当分俳句の方には手をつけられそうにない。

私は、急遽予定を変更して、元の同僚で八年前に急逝した、高井正一の詩業について書くことにした。「ものたちの界」というタイトルは、あの世とこの世を結ぶ影と形である「もの」、つまりあの世とこの世との間の混沌のなかを漂う「もの」である高井自身の、内面世界を意味するものである。

高井は、若い頃から中央の詩壇に、「九州に高井あり」とうたわれるほどの才能を認められていたのであったが、没後は全くといっていいほど名前を語る者もない。明るさと苦渋をなймаぜにした、独特の語り口に才を示した高井の詩業を、このまま埋もれさせるにはしのびないとかねがね思ってきただけに、いったんとりかかると、面白いほど仕事がかどった。

高井の生い立ちと、彼の文学に最も深い影響を与えたと思われる禅寺での小僧時代、母の死、と書いているうちに胸が熱くなってきた。脳血栓で倒れたと聞いたときの、八年前のあの寒い朝の衝撃が、何度も蘇ってくる。

市内の国立病院にとるものもとりあえず駆けつけたときには、高井は手術室のなかだった。暗い廊下の隅に私たちは、とてつもない永い時間、ひっそりうづくまっていた。

誰かが号泣した。高井の、笑いを浮かべ、人をかっいでいるのではないかとも見える顔にすがって、男たちが哭いていた。私は、奇妙なかたちに湾曲してしまった足指をさすりながら、いま「影」になった高井が、天井の節目のあたりからこっそり自分の「形」を見下ろしているのかもしれない、とそんな思いにとらわれ、涙さえ湧いてこなかったことを思い出す。

「電話です」

ドアを締め切った書齋に、妻のかすかな声が届く。階段下の、玄関口に置いてある電話台のところで呼んでいるらしい。

「あなた、電話ですよ」

もう一度呼んでいる。「わかったよ」と答えるが、二階から階下へは声は通り難いとみえる。聞こえないとでも思ったのか、妻は階段をきしませて上がってき始めた。

弾みをつけて勢いよく立とうとした瞬間、鋭い痛みが腰を走る。

思わず、また座り込んでしまう。それがまた、よけい痛い。

「あら、聞こえませんでしたか」

妻がノックもせずに入ってきた。

「わかってる、聞こえたよ」

「まあ、なんとも情けない格好、自業自得ですよ」

冷ややかなことばが落ちてくる。

「頼む、ちよつと引っぱり上げてくれないか。急いで立とうとして、またここらをひねったらしい」

私は、痛みともしびれともつかない不快さがうづくまっている、ベルトのあたりをさすってみせる。

「知りませんよ。どこで遊んできたともしれないのに。病院にもいつてくださいますよ。本当に骨にひびでも入ったらどうします」

結婚したばかりの頃の妻はこうではなかった。なんとか私に論文をものにさせ、私と妻の出身のK大の講師にと懸命だったのであるが、この頃ではどうやら見切りをつけてしまったらしい。それでも、「いまだったら、まだ父の力でどうにかなるかもしれないの」と、ときどき悔しそうにふと洩らすときがある。私は、その妻の攻撃に

さらされる度に、やり場のない焦りを覚えるのであるが、それもだんだん慢性化したアレルギーとなりつつある。

「どうします、いないと断りますか。女の人ですよ、木下とかいう人」

「木下」

妻は、なにかを嗅ぎ当てようとでもする口調で、もう一度「女の人ですよ」といった。

「出るよ」

私は、両肘をてこにして、できるだけ早めに足の方に体重を移す要領で立ち上がった。いったん立ち上がってしまえば、それほど苦痛はない。はやる気持ちを静め、壁を伝いながらそろりそろりと階段を下りる。うしろから、不機嫌に黙り込んだ妻が、二、三段遅れてついてくる。

「お待たせしました、橘ですが」

応答がない。

「橘ですが」

「はい、あの、どうも済みません」

うろたえ気味の、か細い女の声が出た。

「どちらさまでしょう」

冷静を装って、私は訊いてみる。

「木下、理恵というものですが」

「木下さん、はて」

「ええ、北村の」

「北村の、秀夫の」

「あのお、あの人、そちらに伺っていませんでしょうか」

おずおずと、それでいて咳き込むふうにいう。私がきていないと答えると、

「ずっとですか、ずっときておりませんか」

「二週間前に会ったきりです」

「そうですか」

ふうつと、溜め息の抜けていく音が受話器に入ってくる。

「秀夫がどうかしましたか」

「帰らないのです。もうずっと、二週間にもなります」

いきなり、棒杭で一撃された。

あの晩から秀夫は帰っていない。私に平手打ちを食わせて、仁王立ちに叫んでいたあの晩から戻っていない。

「子供が悪いのです。入院して五日になります。すぐ、連絡をとりたいのです」

妻が、疑わしそうな目付きで、私の耳元に擦り寄ってきた。

木下理恵から聞いた小児科医院は、ミレーの通りから百メートルばかり入った狭いT字路の角にある。ミレーの通りの喧騒に比べ、わずかに踏み込んだだけであるのに、あたりは信じられないほどの静寂をみせている。

受付で病室を尋ねると、二階の奥だと教えてくれた。私は果物の籠を小脇に抱え、古びた階段を上がっていく。

「わざわざお出いただくなんて、考えてもいませんでしたのに」

私が入っていくと、理恵はベッドの傍らの丸椅子から急いで立ち上がった。カーテンを洩れてくる光を背にゆらりと立ったその姿には、どことなく線の細い少女の影がある。肌の色も、五日間の病院暮らしにしては、消毒臭い壁の色に十分なじんで、透き通るほどに青白い。

「疲れて眠ってしまいました」

理恵はベッドの子供を見やった。そして、パジャマの裾からはみ出した子供の足に、静かに毛布をかけてやる。

子供の顔はしかし、五日間入院している病気の顔には見えない。

理恵の青白さに比べ、唇には赤みさえさしている。

「お子さんはお一人ですか」

「この子だけです」

「ご心配なさったでしょう」

「でも、なんとか大丈夫です。先生も、あとは食欲が出るのを待つだけだとおっしゃっています」

理恵の表情が和んでくる。口元をほころばせると、目尻に数本のしわが寄ってくる。若いと思っただけで、それほどでもないのかも知れない。

「こんなこと初めてなんです。先生から、子供を殺すつもりかと怒られてしまいました。これまでもよくひきつけたり、高い熱を出したりはしてたんです。でも、今度は熱もひきつけもなく、ただ吐くだけだったのです。たいしたことはないだろうと、二日間様子をみていました。そうしたら、突然呼んでも答えなくなってしまったんです」

「だとすると、脱水症状とか」

私の子供の頃、風邪をこじらせたときに二、三度かかったという症状に似ている。もつとも、私の場合は入院にまでは至らなかった。

「ええ、もう少しで手遅れだっていわれました。点滴だけで命をつないでいるのです。それも、私に原因があるという」

「あなたが原因」

「ええ、子供のストレスが原因だそうです。その原因をつくったの

が、親のストレスってことになるのだそうです。そういわれると、私、思い当たることばかりで」

理恵は、私に折りたたみ椅子を勧め、自分も元の丸椅子に腰を下ろした。私は、抜けるほどの腰の痛みにも、しばらくは口もきけないでいる。

「私、あの人が帰らなくなってからというものの、いつも不安に怯えてきました。あの人、もう帰ってこないんじゃないか、ひよつとしたら今度こそ本当に死んでしまうんじゃないかと、心配でならないのです。お恥ずかしい話ですが、これまでもあの人とはたびたび帰ってこないことがあったんです。ええ、三か月も、半年も帰らないことだってありました。でも、今度は違う。わかるのです。このまま糸が千切れてしまいそうな気がするのです」

理恵は、子供の寝顔をすがめた目で見やっつてから、窓の下の路地のあたりに視線をゆっくり移した。

「あの人は、女のところへいったのです」

そうだったのか、と私は思った。あの晩、れい子が濡れた秀夫の頬から首筋へとハンカチを当てていた姿が、蘇ってくる。「ケンジ」と叫んで、秀夫の腕にすがりついたときのれい子の声が、いまでも鮮やかに耳の底に残っている。

「いえ、女のところでもかまわないのです」

理恵の声は乾いている。乾いて、かすれ、消毒臭い壁の色のなかにすうっと消えていってしまふ。

「あの人は、いまでも追われてると思っっているんです」

「思っている」

「そうです」

理恵は、自分がいったことばの意味に初めて気が付いたというふうに、はっと口を噤んだ。そして、そのまま俯いてしまった。ひつつめた髪のために露になった耳のうしろの血管が、小刻みにふくらんだり縮んだりする。右の掌を膝にのせたり、左の掌を胸に当てたり、一方の肘をさすったりする。

「ちつともかまいません。私にできることでしたら、何でもおっしゃってください」

私は、秀夫とは隣の村の生まれであること、高校時代はライバルであったこと、現在は私大の講師をしていること、それに先日は自分の軽はずみな誘いで秀夫を傷つけてしまったかもしれないこと、などを手短かに話した。理恵は、私の話を、肩を大きく上下させ、荒い息を何度も吐きながら聞いていたが、

「ご存じでしょうか。十五年前の一連の都内での爆破事件。あの容疑者だと、本人は思っているのです」

「あの連続爆破事件」

「私がいけないのです」

理恵は、キツと私をふり仰いだ。一瞬、その目がなにもものかにかに憑かれたというふうに見開かれ、私にからみついてきた。が、すぐに元の悲しそうな表情に戻った。

「気が付いたときには、あの人は部屋の隅に転がっていました。部屋のなかにはめちやめちやです。こたつ板は叩き割られ、椅子は跳ねとばされ、本やビラは散乱しています。あの人は、自分の体から流れ出た血の海のなかに、それこそ濡れ通り、転がっているのです。私は、あの人の右掌が握りしめている鋭く光るものを見つけ、それが割れたガラス片であるのを知ったとき、もう一度すうっと気が遠くなるのを覚えました」

理恵は、寒い景色を遠くに見ているという表情でいう。

その日、秀夫と理恵が所属するA派は、翌朝未明に都内の数か所の派出所を襲撃することになっており、そのレポ役でもあった理恵は、役目を終えて秀夫のアパートである中野のアジトに戻ってきた。理恵は都電を降りてタクシーに乗り換え、さらに地下鉄に乗り、降りてからもいったん区役所の方に歩き、また戻るといったやり方で秀夫の待つアジトにたどり着いた。

秀夫は幹部ではなかったが、学園闘争から米軍基地返還闘争を通じて目立った働きをしており、逮捕歴もあった。そのため、翌朝の襲撃では一軍の指揮をまかされるまでになっている。

「うまくいったか」

「失敗なんかしないわ」

「いよいよ明日だな」

「あなたの方もうまくいってるの」

「大丈夫だ。あとは、十一時に黒川と吉田がくれば決行だ」

「得物の準備は」

「このとおりだ」

秀夫は、物を隠すために細工をした押入の底板をとりはずし、白鉛色に鈍く光るパイプをとり出した。

「こいつがあれば、四、五人は倒せる」

理恵の腰に、ふいに秀夫の腕がからみついてきた。腕は、性急に理恵のスカートひだを分け、裾をめくり、肉の部分をまさぐり始める。

「待って、いまは駄目。黒川さんたちがくる」

「かまうもんか」

秀夫は、歯を鳴らして理恵の肌をむしゃぶりついた。「かまやしねえ」荒々しい息づかいのままにいう。

「待って、大事なときよ、そんなこと」

しかし、極度の緊張に耐えてきた理恵の体は、自分のことばとは反対に、秀夫の動きに合わせて熱く激しい疲労のリズムに墜ちていった。

「ドアが鳴ったんです。私たちは我に返って、急いで身づくろいを始めました。ちょうど、十一時前五分です。どこでどう気持に隙間ができたのか、このときの心境はいまでも自分ながらおぞましいほどです。黒川さんたちがきた、と弾かれる気持が先にたったのです。大急ぎで下着を着け、あの人の身づくろいも終わるか終わらないうちに、私はノブの鍵を開けてしまったのです。」

そのとき、黒い影の一団が私を跳ねとばし、あの人へとなだれかかっていきました。煙が目の前をよぎっていく。そんな奇妙な間があったのを覚えています。『危ない』と私が叫んだときには、あの人は一撃を肩口に受けてこたつの向こうに吹つとんでいました。その上に、影が折り重なりかぶさっていきます。金属が風を切る音と、肉のつぶれる音とが、不気味な静寂を思わせるのです。」

理恵は目をつぶって、抑揚のない声で話す。ひつつめて、うしろで束ねた髪には、いく本かの白いものがまじっている。

「あの人が殺される、と思いました。打ちすえられているのに、声もたてないのです。両手で頭を抱え込んで、足を痙攣させています。思わず私は、足元に転がったままの鉄パイプをつかんで、影のなかに突っ込んでいきました。『やめて、あんたたちも一緒に吹つとばしてやる』そんなことを叫んで、彼らをベランダまで追い詰めたのです。ヘルメットの下の彼らの目に、一瞬恐怖の色が走るのを見逃しませんでした。」

しかし、私は、玄関にひそんでいたもう一人の影に気付かなかつたのです。うしろからはがい締めにもされた私が、今度は打ちすえられる番です。鈍い痛みが背中に入り込みました。」

理恵は、ハッと目を開いた。子供が、ウウツと泣き声をたてたのである。理恵は、腰を浮かせて、子供の顔を覗き込む。

夢にでもうなされたのか、すぐに子供は泣き止んだ。泣き止んだあとは、また眠りに入っていく。

「お二人とも、それでよく命が救われましたね」

「ええ、あの頃はまだ、致命傷までは与えないという不文律が生きていた時代なのです。一時的なダメージを与えて、その派から離脱させようというのが一番のねらひだったので。」

それに、幸運もありました。十一時ちょうどに黒川、吉田の二人がやってきたのです。影たちは、あらかじめ打ち合わせていたのか、ベランダ伝いに逃げて、瞬く間に姿をくらましてしまいました」

「幸いだった、といえなくもないですね」

私は溜め息をついた。手荒につかめば折れてしまいそうな理恵の青白い喉元を見ていると、絶えず官憲や他派との血みどろの抗争を繰り返してきたというA派の構成員として、こんな華奢な体のどこにそんなエネルギーがひそんでいたのかと、不思議に思えてくる。「いまになつて思うのです。いつそあのと、二人とも殺されていたらよかつたのかもしれない」

理恵は、幸運だったといったそばから、沈んだ口調になる。

「彼らの一撃が、あの人の前頭部に命中したのです。それ以来、あの人は、自分が爆破事件の容疑者だと思い込んでいるのです。『追われている』、『見ろ、俺の手配写真だ』とあの人によく似た、B派のUの写真を目にする度におびえるのです」

「でも、秀夫の顔はあんなに変わってしまった」

「あの傷は、自分で焼いたのです」

「自分で、焼いた」

「俺は絶対つかまりはしないぞ、逃げのびてやるぞといいながら、私の鏡台の前で穴のあくほど自分の顔を睨んでいたあの人は、あつという間にマニキュアの徐光液をふりかけ、ライターで火を点けてしまったのです」

理恵は、唇の色まで失せてしまっている。こんな話は、恐らく、かつて誰にも洩らしたことがなかったのではないだろうか。

理恵が、あの人が自分で除光液をふりかけ、火を点けてしまったといったとき、私は目の前に立ち上がる一本の火柱を見た。ポウポウと音が弾け、肉のこげる痛さにのたくる秀夫のうめきを聞いた。

それにしても、自分で自分の顔を消そうとする秀夫の気持がわからない。私の知っている秀夫は、そんな男ではなかった。純朴ではあるが、自信に満ちたどこまでも挑戦的な男だった。

「あの人が、この頃いくらか元気になっていたのです。半年と続かなかった仕事が、二年も続いているのです。この顔だったら誰にもわかるまい、もちろん警察にもわかるまいと、運転免許をとって、それまで助手だったのが、T運送という会社の正規の運転手に採用されたのです。おかしな理屈だと思っんです。本当に警察に追われているのなら、わざわざ住民票をもつて試験場にいくなど、考えられないことなのです。もつとも、北村という名前ではないのですけれど」

「筋が通りませんね」

私の頭に、「ケンジ」というらしい子の呼んだ名前が、またふいに浮かんできた。「ケンジ。キノシタケンジ」と二、三度つぶやいてみる。

「それなのに、自分は追われている、と一方ではくどいほどいいます。その一方で、これでいつでも逃げ出せるぞ、と免許証を誇らし気に見せたりするのです」

私は、逃げおおせるつもりで秀夫が、手首にナイフで切り付けた
りするものだろうか、と考える。理恵もまた、そんな秀夫の手首の
傷のことを知っているのだろうか、といぶかる。

「そんなあの人にひつかかる女も女です。いいえ、私も疲れ果てて、
本当はどうでもいいのです。欲しいのなら、いつでもあげてやつて
もいいと思っっています。そうすればいい、せいせいするかもしれ
ません。」

でも、あの人のいないときに限ってこの子が悪くなるのです。決
まって、そうなるのです。いくら親子とはいえ、そんなにまで呼び
合うこともないと思うんですけど。だから、もう一度、この子のた
めに帰って欲しいのです。ほんの一日だけでもいいのです」

「この子は秀夫の子ですか」

理恵は、私の頓狂な質問に、怪訝そうに目を見張った。

「秀夫は、自分の子供なんか誰にも産ませないといっていました」
「そうですか、あの人は自分の子供のこともわからないほどにスス
んでいるのですか。そうかもしれないですね。でも、仕方のないこと
です。こうなることは、以前からわかっていました」

日が落ちたわけでもないのに、理恵の表情には暗い翳りが一面に
影を吹いている。かみしめた唇が、紫色から蠟の色に変わっていく。

(五)

理恵の話に出てきたT運送という会社が北区にあり、長距離トラ
ックが出入りするのを通勤途上によく見ていた。

秀夫の仕事を詮索しようというのではなかった。

二週間もの間秀夫が帰らないという理恵のことばに、呵責を覚え
ずにはいられないのだ。と、自分のうちにいささかしい訳じみたこ
とばを繰り返しながら、その見慣れた門をくぐった。

守衛室で秀夫の名前を尋ねると、私のいでたちになにかキナ臭い
ものでも感じたのか、昼寝から醒めたばかりとしか見えない顔をし
た制帽の下の細い目が薄く光り、黙ったまま右手奥の建物を指さし
た。そこで尋ねればいいのかと訊くと、面倒くさそうに頷いた。

トラックがエンジンをつかしながら横切っていくロータリーを越
え、倉庫の隅に設けられた管理事務所という札のかかった部屋に入
る。部屋は、壁や天井が剥き出しのコンクリートになっており、だ
だっ広い空間に机が五つばかり並び、カウンターの奥にジャン
パーを着た男が二人と、電算機に向かう女が二人いる。

カウンターに立つと、五十年配の男が顔を上げた。私が仕事客で
はないことがわかるらしく、用心深げに歩み寄る。

「こちらに、木下研次という運転手の人はいませんか」

私は、名刺をさし出した上で、自分はある作家の近作についての論評をしようとしている者であるが、その人物にとつて欠かせない友人のことを調べるためにきたのだという来訪の目的を告げ、協力を求めた。管理事務所長だと名乗った男は、

「木下研次、聞いたことないですね」

こんな場所になんの用がある、という顔になる。

「北村秀夫という人はいませんか」

「北村秀夫、いませんね」

「関西方面に仕事でよく出かけるといいます」

「うちは、関西でも関東でも東北でも、どこまででも出かけますよ」男の表情に薄笑いが混じった。つまらない私的な用事に付き合っている暇はない、とその目がいつている。

私は、秀夫が名前をいくつも使い分けているということ承知している、最後の手を出してみる。

「その人は、左頬に大きなやけどを負った」

「やけどを負ったのなら坂田という。それがなにか」

男は、すんなり社員の名前を口にした。

「坂田さんというんですか。その坂田さんは四十歳ぐらいで、ここに勤めて二年になる。声は特徴のあるしゃがれ声で」

「しゃがれ声。そうですよ、坂田は」

「私の探している人の名前は木下というふうに聞いたんですが、ひよっとしたら私の勘違いかもしれないのです。なにしろ、作家の交遊仲間が皆飲んだくれで、私が聞き書きした資料のなかに出てくる複数の人物名が取り違えやすいものですから。で、その坂田さんにお会いすることはできないでしょうか」

職業柄、手がかりにたどりついたときの私は、かなり強引になる。

こんなとき相手方は、いまはいないとか、自分の一存で判断することはできないので上司に尋ねおくとかいつてその場を逃れるのであるが、男はなにを思ったか、棚の台帳らしいものをとり出しペーヂを繰ると、「今日は非番ですなえ」と答えた。

「非番はいつからなのですか。この頃、勤務にはついていきますか」

「昨日からです。ちゃんと、正常に勤務してますよ。それがなにか」

「なにか変わったことはありませんか、特にこの二週間ばかり」

「帳簿から見ると、なにも変わりはありません」

「言動になにか変化が見られるとか。そうそう、彼はかなりの腕前の俳人なのですが」

私の執拗とも思える質問に、男はいくらか閉口してきたらしく、用件はそれだけですかとといった挙げ句、

「うちの社員は、みんな気のいい連中ばかりですよ。なにね、うちにはちゃんと家族的な雰囲気が残ってまして、それが社是でもあ

ります。スピードと安全が求められる仕事柄、業績よりも、まず社員を生かす道をとる。ところが、これが不思議なことに業績にはね返る、というわけでした。ですから社員の健康診断、とりわけカウンセラーの面には自信があります。勤務につく前、私は社員一人一人とことばを交わし送り出すわけですから、もしなにか変わったことがあれば、すぐに私の目にとまります。坂田君は、顔面の傷など少しも感じさせない明朗な性格でした。それに、彼はすごく頭が切れる。いつも、こちらが求める先を読んでやってくれるので、うちの働き頭の一人にあげられますよ。最も、坂田君があなたのおっしゃるほどの優れた俳人かどうかまで、私にはつかめませんが」と、会社のセールの方々に話をきり替えた。

これが潮時と察した私は、ぶしつけな訪問にに応じてもらった礼がいい、管理事務所を出た。出がけに、事務所の方に歩み寄ってくる運転手らしい二人を見かけたが、二人とも気の下さそうな男で、これからの勤務につくための手続きにでもきたのか、二台の大型トラックが、二人の後方にエンジンをかけたまま止まっていた。

私には、これだけで十分だった。

秀夫がこの二週間、普段と変わらない勤務についているという確認ができただけで、胸を締めつけていたものがいく分和らいだ。

しかし、意外だったのは、秀夫が明朗で受けのよい社員であるということだった。

理恵のいい分では、家に帰ったり帰らなかったり、子供の泣き声に敏感に反応し、左頬の傷に執着しては、十五年前の罪科から逃げおおせようと必死になっている。それも、襲撃を受けた怪我がもとで頭のススんでしまった男、という具合になる。

私自身、ミレーからエンゼルにかけて見た秀夫の様は、理恵のいうことと重なり合うのであるから、事務所長の話がうまく飲み込めない。

しかも、高速道路を百二十キロのスピードで走行しながら、ナイフで腕に切りつけるという秀夫の神経は、頭部を負傷して頭のススんでしまったというだけの男のものとは違う。もつと凄惨な、いや精緻に仕組まれた、あの『鳩赤い胸のうちをぶら下げたまま時間の真円を歩く』や『ハンカチ落ちている夜の線路をまたぐ』に通う、いきなり炎え上がり、炎え上がったかと思うとカラリと消え失せてしまうといった、炎の向こうまで見通し、あざ笑うというほどの神経なのだ、と私は思っている。

これが挫折中退の己れをあざ笑っているのか、罪科からどこまでも逃げおおせようとする呪縛のなかでの己れ自身が身にとった歪みであるのか、いずれともわからないのであるが、この二十年とい

う歲月の間に降り注いだもののぶ厚さにたじろぐ思いである。

けれども、事務所長の話からすれば、T運送のなかにはちゃんと二十年前の秀夫がいる。快活で、明晰で、負けず嫌いだった秀夫が、そっくりそのままいる。

鳩の句やハンカチの句を詠むといった神経の秀夫のうちに、上司や同僚との関係をちゃんとやっていた部分が残っているのだと考えると、なんともいえない安堵を覚える。

しかし、そんなことは、あのかつての秀夫だったら当然のことなのだ。外交官やマスコミを目指し、トップを走っていた頃の秀夫だったら、朝飯前のことなのだ。

人前に出るのが苦手で、他人と話すのがおっくうだった私の方が教壇に立ち、どんな相手に対してももの怖じせず、表舞台に立つのが好きで、またそれを夢みていた秀夫の方が潜伏生活を送らねばならないなど、なにかが間違っている。

「お前、どうする」

しのつく雨のなかで終バスを待っていた私に、珍しく秀夫が話しかけてきた。

県下の英語弁論大会を二年連続で制した秀夫は、E S S部長を後輩に譲ったものの、毎日放課後の部室に残って指導を続けていた。

私は、授業が終ってすぐ家に帰ると田や畑の手伝いが待っているので、学校の門が閉まるまで図書室に籠もった。受験のことは二年生の三学期に心にかけて始めたばかりだったので、とにかく時間が無いのだった。

農家の長男が大学に進むというのは、私の高校ではあまり例がなく、進んでも殆どが将来地元に戻ってくることでできる教師の道を選んだ。私には弟妹が三人あり、母が病弱なこともあって進学は無理だと告げられていたが、自分のレベルの仲間が殆ど受験するという状況のなか、仕送りなしのアルバイトをしてでも進学しようと決めたのである。

といって、親の承諾をとりつけたわけではなく、そんな気配を察したらしい母から、毎晩考え直してくれないかと泣きつかれていた。長男が進学すると、田畑が荒れてしまうというのが農家の定説だった。進学をすると二度と農業に戻ったというためしがなく、仮に地元の教師として戻ってきてても、転勤や結婚を機に、結局家を捨てることになる。そうになると、年老いた親の手に負えなくなった田畑は荒れ、先祖の供養も粗末にするようになってしまう。

高校を卒業して役場などにでも勤めてくれればそれがすべて解決するし、弟二人、妹一人のこれからの学費もばかにならないし、と母はしつように迫った。

「家や田畑や山、これら財産すべてを浩一に渡すんだ。これだけあれば不自由はしないだろうし、これを長男に渡さないと先々ややこしいことになるんだよ」

一番下の弟は小学校一年生にあがったばかりで、先々なにがややこしいことになるのか私には実感できなかったのであるが、ただ、こう毎晩泣きつかれてみると、妙に反発したくなる。

長男、長男といわれることが、このときほど息苦しいことはなかった。

農家の長男であるから、目の前の財貨と引き替えに将来を奪われなければならぬのだという。そんな理不尽な話があつていいのか、と地団駄を踏みたい気持だった。

わずかの時間でいいから街にも住んでみたいし、もう少し勉強も続けたい。それより、広い世界で一度自分の可能性を試してみたい。いくら長男であるからといって、伸びようとする子供の芽を乱暴に摘み取ってよいというものでもなからう。そう考えた。

「どうするって」

私は、秀夫のぶっきらぼうなことばの意味をはかりかねた。

「やっぱり止めるのか、文学部」

「文学部」といいかけて、私は自分のうちでなにかが少し弾けたのを覚えた。

自分でアルバイトをしても進学しようという方向に傾いてはきたものの、まだ教育学部のほかにこれといって思い浮かぶ学部はなかった。啄木や牧水が好きなだけということ、文学部を選ぶなど考えもしないことだった。

「家のことがなあ」

「そうか」

フム、と秀夫は鼻をひくつかせた。隣り村に住む秀夫とは幼い頃から行き来があり、その家族のことも互いに見知っている。

秀夫の家も私の家と同じ規模の田畑を持つ農家だから、子供を上級学校に出すという点での事情は変わらない。ただ、秀夫の父は地域役職という役職をいくつも任せられ、いつか村会議員にという声のかかる人物だったから、子供の将来を見る目に自ずと開きがあることは否めない。しかしそんな秀夫も、休日には一日中田畑にかり出されるのである。

「町の連中なんぞに、おめおめと」

町の連中に負けてたまるかというのが秀夫の口癖であり、実際、英語の力は村でも町でもない、県下のナンバーワンを占め、理数科目も強かった。私には、秀夫がいったいいつ、どのようにして力をつけるのか、不思議でならなかった。

「村や町の世話役なんぞで満足していたってな」

秀夫は、父のことをそういい、自分の守備範囲はそんなけちなもんじゃ無いといいきった。その足掛かりのためにも、県下に名前を響かせ、実績を積んでいくことがポイントであると定め、周囲に有無をいわせない結果を示していった。

「もし、小さな鉢に納まりきれない花があったとする。しかも、類い稀な美しさをもつ花であったとする。その希有の花を、いったい小さな鉢のまま小さく咲かせようとしてよいのか。自分の所有物だという理屈だけで、多くの目につかないままにうち枯れさせるといふ挙に出てよいのか」

秀夫をとり巻く状況は私とは何倍も違うとはいえ、そこはやはり農家の長男であった。外語大に進むのも、外交官になるのも、それは弟妹に譲り、自分はせめて地元で職を求めて田畑の荒れるのを最小限に食い止めねばならない。いつも、そんな思いに塞がれるのだという。

秀夫の二歳下になる双子の弟妹は、あるいは秀夫をしのぐかもしれないという頭脳の冴えを持っており、両親もそれを誇りにしていた。

「結局、俺たちは山の向こうを見ることのない、どこかで目隠しをされてしまった、ていのいい人質なのかもしれない」

ときどき、そう吐き捨てる秀夫を見ることがあった。

「家のことかよ」

秀夫は、どこか不機嫌な口調でいい、視線を垂れ込めている空に向けた。

「俺はな、いや俺もな、イラついている。しかし、どこかでケツをまくらんことには埒があかんからな。一つ賭けに出たのさ。一世一代の大勝負だ」

そういうと、秀夫は始めて口元をほころばせた。色白で面長の頬がいく分上気している。

「俺は、これから一週間の間に、この梅雨があがると賭ける。梅雨があがれば、なに迷うことなく俺の道を選ぶ。負ければ、丸坊主よろしく、ということさ」

「梅雨があがる、か。七分、三分だな」

私は、思わずそれは無理だ、といおうとしてことばを濁した。とにかく、この雨といたらなかった。

春先から不順な天候が続いていたが、日照不足のままいつの間にか梅雨入りし、丸二か月というもの来る日も来る日も雨だった。おかげで、畑の麦は痩せた実をつけたものの穫り入れができず、立つたまま芽が出るというありさまで、田の方も苗が何度も冠水して根

腐れを起こしかけていた。

みんなは、排水の通りをよくするため間断なく畦の水落としをし、空を仰ぎ吐息をついた。このままいくと、未曾有の不作となる恐れがあり、種籾さえ収穫できないのではないかとの心配もされた。煙草、野菜、果物も青白い葉が細く伸びるばかりで、なかなか実を結ぼうとしない。

雨がこれ以上続くと生活の基盤さえ失いかねず、農家にとつてはそれこそ、上級学校への進学など夢物語に過ぎなくなってしまう。

この梅雨があがるという予報はどこの气象台も出していなかったし、事実、例年の時期と比較しても梅雨あけはかなり先のことと思われた。

「七分、三分、いや九分、一分かな」

秀夫のことばがどこか震えている。いつもだと、テノールのよく通る声で、流暢に英語を操り、クラスでも率先してまとめ役としての発言をする。英語弁論大会で二連覇をなすとげたのはほんの一月足らず前のことであつたし、新聞にも大きくとりあげられ、華々しい脚光をあびた。その秀夫のことばがどうしようもなく投げ遣りである。

「しようがあるまい。しかし、これでこそ一世一代の賭けにふさわしい大勝負ともいえるな。運を天にまかせる、というやつだ」

一人でフムと頷き、「お前が証人だ、よいな」といい放つと、秀夫はいつもの表情に戻り、手のなかに丸めていた学帽をあみだに被つた。

私も、ひそかに、秀夫の賭けに、自分を賭けてみることにした。

証人になつた以上、というわけでもなかったが、秀夫の賭けがまるで無謀なことに思え、殆ど勝ち目はないのだから、結局、誰もが安堵する方向に決着をみるのも悪くはないと考えた。

そうなると、毎晩母から泣きつかれて、逆らうことなく、しかも、一度は自分の運勢を賭けてみた上での決着であるから、自分自身をも説得できるのではないかと思つた。それにより、秀夫と同じ歩調をとることになるのであるから、心強い。

翌日、翌々と雨は続いた。壁や畳は水分を重く含み、押入れの布団や衣類には黴が生えてい

る。そのまた翌日は、夕方から叩きつけるほどの降りになった。傘をさしていても濡れ通つてしまい、畦の水を落としに出かけた父が水路の濁流に巻き込まれ、危うく篠竹にしがみついて難を逃れたと、唇を土色に染めながら戻ってきた。

その夜はさらに雨量を増し、県庁所在地であるN市では、鉄砲水

で数十人の死者が出るという惨事となり、降りつゝの雨はなお勢いを止めようとしなかった。

水害の話で騒々しい学校で、秀夫は、どこかふてぶてしささえみせる顔で、話の中心にいた。英語弁論大会が開かれた県の中央会館が臨時避難所になっているらしく、N市の地理に慣れている秀夫にクラス中が群がった。

「N市そのものが摺り鉢の底の位置にあたるからな、少しの雨が降っただけで排水溝が溢れ出す。道を歩くと、靴の上から水が侵入してくる。川はすぐに水嵩を増して走り始め、坂の街は煙って視界がきかなくなってしまう。旅人にとってはえもいわれぬ美しい街であるかもしれないが、住人にとっては、常に危険と隣合わせというところにもなる。まあ、それが国際観光都市N市に住むという矜持にもつながり、N市がN市たる所以でもあるのだけれどな」

「避難所の方は大丈夫か」

「中央会館は比較的高台にあり、周囲には迫った崖もないから、臨時避難所にあてられたんだらう。三千人ぐらいだったら、十分収容は可能だろうな」

秀夫は、自分自身の賭けのことはどこ吹く風といったありさまで、群れのなかでよくしゃべる。はつきりした輪郭の、秀夫の目から鼻にかけての線が、伸ばし始めた髪の毛の形とマツチして、ときおりや日本人離れした角度を描いてみせる。

四日目も五日目も、かなり雨足の激しい降りが続いた。幾度となく耳を傾ける気象情報も、芳しい予報はなに一つ流さなかった。

私は、観念した。

これではあまりにも残酷過ぎる気がしないでもなかった。最初から負けるとわかつている賭けに出て、しかも自分自身の将来を賭けたのだ。つい、舌打ちをしたくなってしまう自分をかろうじて支えていたのは、秀夫ももろともなのだ、という思いだけだった。

六日目の朝、それは日曜日であったが、早朝からの父の大声で眠りが破られた。

「なにやら雨が止みよった」

朝闇のなかで、父の声がうわずっている。

寝ぼけ半分だった私の目が、いっぺんに開いた。布団を蹴つてとび起きると、庭に走り出た。うっすらと星が光っていた。ほんの夜半まで、どろりと垂れていた雲がところどころ切れていた。

私たちは、朝飯もそこそこに田圃に出た。

父は、「やれるだけのことはやってみんとな」と、いささか興奮の体である。畦の水を落とし、倒れた苗を一本一本起こしてやるのだという。

気の遠くなりそうな思いで一本一本の苗を起こし、一枚の田の半分ほどまでできたとき、いよいよ背後に日差しがのぼり始める気配がしてきた。

私たちは、まだ勢いの衰えない水を落とすための道筋をこしらえる手をしばらく休め、あたりにいきなり金色のシャワーを降らせ、山の影からぬるりと躍り出たゆで蛸だとしか見えない太陽に、ものもいわずに見入った。実に、二か月近くもの間姿をみせなかった太陽が、山の端にかかる薄雲を掻き分け、ぶ厚い水蒸気を払いながらふいにのぼってきたのである。

太陽が高くのぼるにつれ、ところどころに残っていた雲は少しずつ移りゆき、昼頃には真上から照りつける日差しだけが、強く降り注いだ。

「ひよつとして、もうお日さんは拝めんのかと思うとった」

父は何度も太陽を見上げてはいい、畦道から畔道を伝い走った。私も、弟も妹も父の後に続き、畦の水を落とし、一本一本の苗を丹念に起こしていった。

久しぶりに、じかに受ける日差しと、水面から立ちあがってくる蒸気の熱に蒸され、最初は息苦しいばかりであったが、ひとしきり汗をかくとここちよい気分になった。冷たかった水もぬるみ始め、激しかった沢の水音もだんだんゆるやかになってきた。

沢の水音が静かになってくると、途端に、耳の端にどこか遠くで鳴くクマ蝉の声が躍り込んできた。

梅雨あけ宣言は、この日から二週間も過ぎて、二週間遡るという異例のかたちで宣せられた。

夏休みの補習授業が始まり、登校すると秀夫がいた。この時期の補習授業は、半年後の受験のために組まれるのであったから、クラス全員が受けるわけではなかった。

授業時間中は、二人ともそしらぬふりで通したが、昼休みに図書館にいくと、秀夫が先にきていた。外に出ようというので図書館裏のベンチに座ると、どこだと訊いてきた。私は、とっさに文学部だと答えた。秀夫は、東京の外語大だといった。

「冷汗ものだったな」

「だからこそ、一世一代の賭けだといったじゃないか」

秀夫は、こともなげにいう。

「もし、反対の結果が出ていたら」

「もちろんここにいない。しかし、賭けの目が反対に出たらなんてことは、最初から頭がないけどな」

秀夫は、よく通る声で空に向かっていった。空は、梅雨あけ宣言が出されて以来、雲一つない油照りになっていた。

「俺は、過ぎ去ったことは振り返らんのだ。俺の道をいくと決心したとおり、全力をあげて突っ走る。それだけだ」

秀夫の実力は誰もが認めており、また秀夫が攻めに転じたときの強さは、いやというほどにみせつけられてきた。

「やはり外交官か、外信部の記者か」

「お前はどうか」

「はつきりしたものはない」

「例の、苔の生えちまいそうな」

「ああ」

私には、職業へのイメージがない。役場勤めや、教員となって村に戻るというケースを除けば、結局なんであつてもいいのだ。その程度の意識しかない。

秀夫の賭けに自分も賭け、その目が勝ちと出たいまも、いまだにふつきれない気持で揺れ続けている。

まだ誰を説得したわけでもないし、母に説明してすぐに良策が得られるというものでもないだろう。弟妹にも、長男である自分が出ることになるかもしれないという相談など、もちかけられやしないのだ。

二十年前の秀夫は、私たちの前で、誰よりも高く存在していた。その秋の村会議員選挙で当選した秀夫の父は、私たちの卒業式で祝辞を読み、秀夫が卒業生総代の挨拶をした。挨拶の内容は、広い視野を持ち、多くの隣人たちのために己れの力の限りを尽くしたいという、秀夫のいつもの持論であったが、出席した父兄たちの席から溜め息に似た感嘆の声があがった。

なにより秀夫は、小、中、高を通じて一度も成績で後れをとつたことのない男であり、ときおりみせる日本人離れのした目から鼻にかけての線は、秀夫の頭脳の冴えと自信とを誇らかにみせているのだ。

だから、秀夫が会社の上司や同僚に受けがいいということは、なにも不思議なことではない。彼は、利口というより、もともと人を懐に呼び込む術を自然にこころえているというところの方が当たっている。

秀夫のまわりにはいつもとり巻きがいたし、一人起つというより、幾人かとともに起つという役を好んでいた。

私は、T運送の管理事務所長のいうことばを信じることができた。秀夫は、この二週間、いつもと変わらない勤務を続けているに違いない。関西方面に生鮮ものを運び、帰りには衣類や電気製品や雑貨を積んでくる。二週間といえば、その往復を三、四回は繰り返しているということになる。

理恵のことばを借りるならば、女のところから出勤し、また女のところに帰るといふコースで。

わからないのは、理恵のいう秀夫の頭の具合である。前頭部を負傷したことからくる精神のバランスに狂いがあるとするなら、はたして長距離トラックの運転手が勤まるものであるか。しかも、上司にも同僚にも破綻をきたした姿を少しもみせることなく、二年以上の勤務を重ねている。

しかし、秀夫の左顔面には顔がない。頬から眉間にかけての皮膚はだいたい色にひきつれ、唇の端はめくれ上がっている。鏡の前で穴のあくほど自分の顔を睨みつけ、マニキュアの除光液をふりかけると、ライターの火を点けたのだ、と理恵はいう。

秀夫自身、時速百二十キロのスピードで国道をとぼしながら、自分の手首にナイフの刃を当てる。十五年もの間追われ続けていることに疲れ、ふと、目の前の宙に開いているドアをくぐろうとしてしまふのだという。

(六)

駅前で、私はタクシーを降りた。降りたところはパチンコ屋の並びになっていて、暮れかけた舗道に立つと、「二十五番台終了しました」というマイクの音が、聞いたことのない歌謡曲に混じって肌を打つ。「しぶちんだぜえ、この店」と、ポケットに手を突っ込んだくわえ煙草の二人連れが、肩でガラス戸を押して出てくる。うしろからは、景品のハンカチの束を抱えた女が、頬を上気させて転がり出てきた。

パチンコ屋の隣には、映画館とゲームセンターが続いている。下半身に蛇をからませ、あえぎのたうつ全裸の女学生の看板を頭上に掲げた映画館の奥からは、すえた靴底の臭いが漂ってくる。

甘納豆屋の角を曲がる。間口の狭い「京子」だとか「銀蝶」だとかの店が、通りの両側にひしめいている。そろそろ開店の札を下げ始めた店もあって、そうでない店では暗いドアの奥まで見せて、ジーンズの娘や割烹着の女がホースで水を撒いたり、塩を盛ったりしている。

「あなたを送って出たでしょう。帰ってみたら、れい子、突然辞めるといふじゃない。そんなに急に辞められたらこっちだって困るよっていうと、泣き出しちまってね。だって、この人かわいそうで見てられないって、泣いてるのよ」

エンゼルのママの声が、私の耳の奥で鳴っている。

「私、よっぽど不機嫌な顔してたのかしら。あの娘も気後れしたのね。しばらくはそのまま、突っ立っていたわ。でも木下さん、放っ

ておけないのよ。ぐでんぐでんだもの。だから、もういいよっていと、あの娘嬉しそうな目をして出ていったわ。それっきりよ」とママはいった。

れい子は、正体を失くした秀夫を、階段のあたりで何度も転びながら押し上げ、車に押し込み、連れ帰ったのだという。れい子のアパートは、駅前のバス停から飲み屋街を抜けたところにあると聞いてきた。線路を渡った。踏切の向こうに、いま通り過ぎたばかりの電車があずき色の車体をくねらせ、すすけた家並のなかに倒れ込んでいく。渡り終えたと思ったら、またすぐに警報機が息を吹き返し鳴り始める。

突き当たりの塀に一丁目とある。ママにもらったメモをとり出し、れい子のアパートの番地を確かめる。二丁目は、もう一つ先の信号を越したあたりらしい。この分なら、なにも駅前でタクシーを降りることもなかった、とその距離にいくらかたじろいでしまう。

T運送を出てあてもないままに、K書房に寄った。

地元の著作家コーナーから新刊本コーナーへと、自然に足が向いていく。なにを探すでもないのに、気が付くとこのコースをたどっている。学生時代からの習慣とはいえ、無意識のうちに同じ場所の、同じ書棚を覗き込む。幾冊かの本に手を伸ばし、ページを繰り、元の位置に戻す。書房に立ち寄ったことに対する儀礼よろしく、いつもその動作を繰り返す。

地元の著作家コーナーには目新しいものはなかった。ひところ、文壇の登龍門を駆けのぼった地元作家の出現があいつぎ、このコーナーではその作家の著作が積みあげられ、作家自身によるサイン会も催され、異様な活気を呈した時期もあったが、最近はそのサイン会才能が枯渇したのか、めったに客の立ち止まらない一角になった。その書架の上隅に、作家の作品には当たらないのだが、義父が還暦の記念に出版した専門書に近い内容の本が並べられている。いつもの位置に置かれた、義父自身の筆になる見慣れた背文字に目をやると、ほかに興味をそそられるものはなかった。

新刊本のコーナーには人だかりが多く、新聞や雑誌の書評を賑わしている女流作家の、情念の迸りを描いた作品を手にし、購入したが、人垣のなかに行き届くことが息苦しくなってきたので早々に退散した。

もう目当てのコーナーはないのだが、念のために、いくつかの同人誌を並べている雑誌の書架を覗いてみた。スポーツ、服飾、趣味の月刊誌や週間誌の書架には、新刊本のコーナーに負けない人垣があるが、同人誌のコーナーは閑散としている。小説、俳句、短歌、詩、エッセイの見慣れた誌が並んでおり、俳句誌には草土、青風と

いう全国誌のほか、地元の数誌も並べられている。が、いずれも有季定型のものばかりで、自由律の誌に出会うことはない。もしやと期待して覗いてはみたものの、Sに出会えるわけもなかった。

私のうちには、理恵のことばとT運送の管理事務所長のことばとが、渦を巻いている。そのどちらのことばも、まぎれもなく秀夫本人を指しているには違いない。ところが、時間の経過とともに、彼らのことばが奇妙な具合に混じりあい、発酵を始める。

しかしいずれにしても、秀夫は、外交官としても、マスコミの外部にも籍を置くことなく、左の顔面を潰し、地下に潜伏したままの日を送ってきたということは、疑いのない事実である。

二十年前、卒業生総代としての挨拶で、視野を広く持ち、他のために力の限りを尽くしたいと誇らしげにいったときの秀夫と、いまの秀夫とがどう結びつくのか、私にはその距離の遙かさを思わずにはいられない。

秀夫自身がこの二十年間というものをどう位置付けているのか、あるいは当人には、その間の隔たりなどないのかもしれないが、秀夫はかつて私たちの誰よりも高く聳えていたのである。あの切れ味鋭い刃みたいだった目から鼻にかけての線は、いまは、こぶとなつて突き出した、だいたい色の皮膚のひきつれのなかに埋められ、めくれ上がった唇の端からは、空気が洩れ出す音に似たしゃがれ声が吐き出される。

秀夫の賭けに賭け、勝ちを拾った私は、気持の整理が十分できないまま地元国立K大の国文科を受けたところ、たまたま受かったのだった。本当に、たまたま、というのもあつかましいほど、私はK大の空気に馴染めず、というよりついていけず、それでも途中で放り出すという反骨に出る勇氣も持ちあわせなかった。

二年後輩になる妻との出会いがなかったら、はたして卒業できていたのだったか。とにかく、妻の父である義父の講座に入り、六年かかって妻とともに卒業した。

卒業の目処はついたものの、出版社、マスコミなど五社を受験したにもかかわらず、就職の内定も得られず、履修はしたものの教職資格も取得するに至らず、母にいい含められていた家のことや弟妹のことも気がかりなままに日だけを繰り返しているうち、義父から修士課程に拾われ、進学したのだった。いまとは異なつて、当時の大学院には成績の比較的劣る者が入るといふ定説があり、自分には仕方のない選択であった。

結局結婚が縁で、義父の世話により現在の職に就くことになったのであるが、私はこれまで、自分の足で歩いてきたという実感を持つたことがない。自分の足で歩くどころか、家のことも、弟妹たち

のことも放つたらかしのまま、これもまた自然のなりゆきで、F市に居を構えることになってしまった。

そんな私が、秀夫を呼んだのである。

購入した女流作家の新刊本をシオルダーバッグに入れると、エンゼルへの道をたどった。

まだ店が開くには早すぎる時間であったが、このまま家路につくのは堪え難いことに思われた。

私が石を投げ、波紋の糸を勝手に手繰り寄せてしまった秀夫は、理恵の元には帰らず、子供が呼び求めていることも知らない。過敏体質の子供は、父親がいずこへとも知れず離れ去ろうとしていることを、持ち前の鋭い本能で察知しているのかもしれない。

秀夫に対する糸を引くことになった私には、いま一度、あの子供の元に秀夫を帰さねばならないという義務がある。義務があるというより、そうしなければなにも始まらないのだ、と思われた。

「もう二週間になるわ」

ママは、私の顔を見るなりいった。

「れい子、辞めちまったのよ。二年も働いてくれたのにね。あの娘優し過ぎるの。でも、木下さんならしょうがないわよね」

ママの表情は、まだ化粧をしていないせいもあるのか、疲れが淀み、青くむくんでみえる。エンゼルのドアは開け放たれ、カウンタ―には椅子が逆さまに乗っている。店は地下一階にあるのに、開け放たれたドアから心地よい風が入り、ママのアップに束ねた髪を撫でていく。奥にれい子よりも若い女が一人いて、棚のグラスを鳴らしながらハタキをかけている。

「もとはといえ、エンゼルには木下さんが先。二月ばかり経った頃だったかしら、前の娘に一週間で辞められ、誰かいないかしらねという話をしていたら、木下さんが、いい娘がいるから使ってくれないかというので、OKしたのよ。れい子、こんな仕事は初めてらしく、最初は結構しくじってばかりいたわ。だけど憎めない娘でね、すぐく頭の回転がいいし、それを鼻にかけることなどなくて、そうエンゼルにはもったいない娘だった。いまどきこんな娘がいるのかというぐらい素直でね」

ママは、木下さんはあの姿からはとても想像できないくらいひょうきんで、木下さんがくるといつも店のなかが和むのだった、という。

「周りのことによく気が付く人だね、お客さんがいみあったりすると上手に仲裁してくれたり、お客さんの入りが淋しいとカウンタ―の隅にいつまでもいてくれるし、新しい団体のお客さんが入ると、すつと消えていくのよ。それがちつともお仕着せではなくなつて、自

然なのよ。ううん、木下さん、火傷のことなどちつとも気にしてなかったし、私たちの方もすっかり忘れてしまっているの」

少し隈の浮いた目を瞬かせ、ママは点けたばかりの煙草の煙を吐いた。

「れい子も、木下さんとベタバタするわけではなし、普通のお客さんと同じ扱いよ。それにれい子、とても身綺麗でね、あの娘目当てにくるファンがたくさんいたけど、浮いたこととかトラブルは全然なかった。二年近くもこんな仕事してて、ちつとも垢に染まらないのよね。いま考えてみると、あの娘は私たちとどこか違っていた。

真正正銘のエンゼルだったのか、それとも」

と、いいかけて、ママは大きく首を振り、

「間違いなく、真正正銘のエンゼルだったのよ」

と、少しことばのあとを潤ませた。しかし、「あれ以来木下さん、音沙汰なしなの」といい、「だつて、れい子辞めちまったんだものね」と、ママは目を閉じた。

あの晩、私が転がっていたフロアのあたりには水がうたれ、空の瓶が無造作にケースにさし込まれている。

ミレーで出会ってからこのフロアに転がされるまでの間、私の見た秀夫は、夜の国道を百二十キロのスピードでとぼしながら、手首にナイフで切りつける男でしかないと思えた。肉汁の色を左顔面いっばいに光らせ、めくれ上がった唇の端から吐き出されるしゃがれ声で、近付く者を威嚇せずにはいないただの荒くれにしかみえなかった。

それは、二十年前を知る私が突然現われたことでの秀夫の変貌であつたのだろうか。かつての、才に恵まれた秀夫を知る私が、無理矢理あらぬ糸を手繰り止せ、姿をみせたことでの居直りであつたのだろうか。

水のうたれたフロアには、まだ箒の目も入れられず、ポテトチップやクラッカーの破片が散らばり、ケースに逆さまに突っ込まれた一本のボトルからこぼれ出たものらしい液体が流れ出、濃いアルコールの匂いが立ちのぼっている。

電話でもかけてからにすればよかつたのだ。

大和荘という墨の流れた表札の前に立ったとき、私はそう思った。どうしてれい子のアパートにまでくる気になつたのだろうか。

「もう二週間にもなるわ」

と、理恵と同じことばをママが溜め息混じりにいったとき、私は居ても立ってもいられない気持になり、エンゼルをとび出したのだ。二週間。この二週間というもの、私は本当になにをしていたのだったろう。腰の痛みにかまけることで、秀夫のこともれい子の

ことも無意識のうちに避けようとしていたのではなかったか。私が勝手に投げた石の波紋を、目をつぶり、腰の痛みを代償とすることで、忘れてしまおうとしていたのではなかったのか。

れい子の部屋は、薄い鉄板を踏んでのぼった二階の突き当たりにあった。

足元には、少しばかりの中身が残り白い膜をはった牛乳瓶が二本、コンクリートの上にじかに置かれている。

私は、ノックをしようとしてさし出しかけた手をひっ込めてしまった。自分のしていることが、ひどく傲慢なことに思える。傲慢であり、自分本位のご都合主義だ、と思う。

私がい子たちの前に姿を現わし、いまさら頭を下げても、なにも始まりはしない。始まりはしないどころか、もう一つや二つの石を投げ入れてしまうことになりかねない。

しかし、居ても立ってもいられない気持で、とにかく自分はこちらまでやってきたのだ。そんな姑息な思いが、いったんひっ込めてしまった手を、また伸ばさせる。私は、下腹から絞りあげてくる不快にとらえられながら、一刷毛の夕日が私の影を刻みつけているドアの前を動けない。

そのまま、じつとドアを見ている。

醜くふくれた私の影が、拡散してドア全体をおおっている。と思うと、今度は子猫に似た敏捷さで現われ、際限もなく縮こまり、しまいには針の鋭さに尖って、粗いドアの木目を刺し貫く。

ドアの内側で床板を擦る足音がして、しばらく止んだかと思うと、またかすかに聞こえる。「聞き違いかしら」とつぶやく声がある。私と一メートルと離れていないところで、足音の主が首を傾げている。

私の影が、針となってドアの木目を刺し貫いたと思った瞬間、私はドアを叩いていた。叩いたあとで、激しい後悔に襲われた。息を殺し岩陰にひそんでいる蟹のつがいを見、泥だらけの手で引きずり出す。そんな行為だ、と体中に熱いしびれを覚えた。

しかし、ドアは応えなかった。ノックの音はしばらくドアの内側にとどまり、やがてがらんどうに抜けていった。

長い時間だった。なにごともない。

私は、かろうじて解放された安堵に胸を撫で、ゆっくりとドアの前を去ろうとした。

「やめろ」

低い、男の押し殺した声がする。

「そうね」

あきらめてしまった足音が、奥へ消えていった。と思ったとき、ストーンとドアがわずかに開いた。

「あっ」

内側の声が同時に叫んだ。

私の目の底から、れい子の裸の輪郭が、ひどく緩慢な動作で立ち上がった。

「ほっとけといってるだろう」

れい子は、ノブに手をかけた前かがみの姿勢のまま立ち尽くしている。

「おい、戻ってこい」

部屋の奥から野太いしゃがれ声がする。れい子は、やっと気が付いたというふうに、首筋まで赤く染めた。そして、あわててドアを引くと、ドアチェーンまでおろしてしまった。

「なに、浩一、本当か」

いったん閉められたドアが、荒々しく開け放たれた。

「貴様、何の用だ」

腐った卵に似た臭いと一緒に、秀夫の痩せたあばら骨がとび出した。あばら骨が、夕日に異様な凹凸を描いている。

「誰に頼まれてきた。理恵か、まさかお前、理恵とぐるになつて俺をサツに突き出そうというんじゃないだろうな」

「違う、違うよ、あの晩のことだ」

「あの晩のこと。ふん、ふざけるなといっておいた筈だ。お前なんか用はない」

「待ってくれ、済まん。何度でも謝る。それより、何か頼みたいことがあるといつてたんじゃないのか」

私は、そんなことをとっさにいえる自分を汚いと思う。教授や義父たちの目ばかりを気にして生きてきたこれが自分の本性だ、と吐き捨てたくなる。

「頼みたい、お前に、バカバカしい」

秀夫は、トレーニングパンツが濡れ通るほどの汗をかいている。

伸びた右顔面の頬髭が思いがけない静けさを見せているのに、左顔面は柿色に充血して、荒々しい情欲を溜め込んだという様相である。

「ふん、よかろう、入れ」

舌打ちをすると、大きく顎をしゃくった。

秀夫は、あぐらをかいて座った。そして、ハイライトを歯で一本引き抜いて、火を点けた。四畳半の居間には、こたつがテーブルがわりに置いてある。

「突っ立ってないで、座ったらどうだ」

秀夫は、ハイライトを深々と吸い込んで、煙を口元から耳たぶのあたりにはわせる。

「れい子と心中でもしてるんじゃないかと期待してきたんだろう」

「都合も訊かずにやってきて、済まない」

「都合を訊いた日にや、お前の手柄を逃すとも思っただらう」

「そんな気はない」

とはいったものの、秀夫にそういわれてみれば半分は当たっているのかもしれない、と改めて気付く。自分のうちには、なんとかして理恵の元に秀夫を連れ戻したいという気持が確かにある。

「理恵か、理恵に頼まれたのか。ふん、察しはついてるさ。あいつが、あることないこと喋っちまったんだらう。女癖が悪いとか、怯えて仕事も手につかんとかな。冗談じゃねえよ。あいつは狂ってるんだ。しかも、いつも俺を殺そうと狙っている」

「そんな筈はない」

いま私の胸の内には、管理事務所長のことばも、エンゼルのママのことばもない。

「あいつは俺を殺そうとした。五度も、六度もだ。第一、俺の方で家に居たくても、あいつが追い出しやがる。そんな奴のところに戻るわけがねえ」

秀夫はうそぶく。でたらめだ、と私は思う。やっぱり秀夫は、頭の具合がススんでいるのだ。辻褄の合わないことをいい始めた秀夫を、私は檻の外から冷ややかに見ている。

「嘘じゃないんです」

ふすまが開いて、ジーンズにTシャツを着たれい子が顔を出した。

「鬼よ、あいつ。研次もあたしも殺されそうになったんです。あたし、あいつと同じ売場で一年間働いたことがあるんです。あたしが売り上げを伸ばす度にあいつがいきりたつ。売り物のサンダルの紐を引き千切ったりして、あたしのせいにするんです。あたしが、商品を傷物にしたと。ううん、研次との関係など勿論なかったんです」

「あいつは、夜道でれい子に切り付けやがった」

「人通りの絶えたお堀端で、あいつは待ちかまえていました。呼び出されたんです、電話で。いきなり暗がりからぶっつかってきたわ。セーターのここところが切り裂かれて、血が吹き出して」

れい子は、脇腹を押さえて顔をゆがめた。

「草の上を転げまわって逃げました。そうしたら、またヒュウととんでくる。今度はふくらはぎ。火がめり込んだかと思うほど熱い。『ちくしょう、犬め』とわけのわからないことを叫んで、馬乗りのにしかかっってきました」

秀夫は、こたつの下から半分ばかり中身の残ったウイスキーをとり出すと、一口あおった。そして、濡れて光る唇をひねり上げ、「あいつのお決まりのセリフだぜ」といった。れい子も、そうなんですと小鼻をふくらませる。

「最初は人違いかと思いました。だって、ねえ、まさかと思うでし

よう。あたしは、左足一本であいつの横っ腹を蹴上げてやった。あいつは吹っこんでいったわ。その隙に、逃げようと思っただんです。でも、もう足が立たない。そうしているうちにあいつがナイフを拾い直して、真上に立ちふさがった。見たんです、そのとき、あいつの顔を。水銀灯にまともに向いた顔は、完全に狂ってた。よだれを流し、剥き出しにした歯を食いしばり、目は宙に浮いていた。嘘じゃない。研次が救ってくれたんです。研次がいなかったら、わけもわからずあんな奴に殺されるところだった」

「俺は、理恵がはだしでとび出していったのを見て後をつけたんだ。『悪魔よ、悪魔を殺してやる』と、ぶつぶついつてたのを聞いていたからな。そうしたら、先にきて待っている女めがけて、あいつがとびかかった。次の瞬間、うめいて転がったのは、あいつと同じ売場のれい子じゃないか。俺は夢中で理恵のナイフを叩き落とし、れい子を抱え起こしたよ。しかし、れい子には悪いけど、どこにも理恵を突き出さなかったぜ。狂ってるなんていったら、もう日の目は見れねえからな」

「突き出せばよかったのに。口惜しいっただけじゃないわ。研次ったら、どこまでも庇おうとするものだから、今度だってあいつに狙われたんです」

「理恵さんが」

私には信じられない。二人の話の聞けば聞くほど、ミレーの奥の小児科医院で見せた理恵の、あの突き詰めて青ざめた表情が、よけいに真実味を増し、膨らんでくる。

「子供を殺そうとしてるって、いつも、あいつが研次を責めるんです。大阪からくたくたで帰ってきた研次に、いったい何ができるというの。ただもう、疲れた体を横にしたいだけなのに、あいつ、夜も昼も寝せないんです。そんなことしてたら、なんでもない者までおかしくなってしまう。出ていけっていうんです。さもないと、ガスの栓をひねって火を点けるとわめく。研次がいると、子供のことが心配で、自分は眠ってなどいられないって、あいつ、目を真っ赤にはらして寝ずの番をするんです」

「あいつは頭の打ちどころが悪かったんだ。多分、中野でのことは理恵から聞いた筈だ。あいつのいうことは、殆どでっちあげのつくり話だけだな。勿論、俺の方が重傷だったさ。あいつなんか俺に比べると、かすり傷ほどもない。でも、あいつは人が変わった。すっかりとな」

「まさか」

「そのまさかだ。あいつも、昔はああじゃなかった。厳しい訓練に耐えてきた優秀な闘士だった。そうさ、仲間だったんだ、俺たちは。でも、狂ってしまったいやがった。こうなると、ただの女より始末が悪

い。俺を、あいつの命をねらってもぐり込んだ刺客と思ひ込んでい
る。だから、俺の顔を見る度に怯えた目で震えてやがる。挙げ句に
は、サツに突き出そうと隙をうかがう」

「そんなふうには、見えなかった」

「とんでもない思い違いだ。そんな呑気なことをいってられるのは、
あいつの本性を知らないからだ」

秀夫は、吸いかけのハイライトを、ガラスの灰皿にいまいまし気
に揉みつぶした。

「俺だって、やむなく理恵と離れようとしたさ。しかし、何度も同
じ修羅場をくぐってきた仲じゃないか。むげにもできんだよ、む
げにもな」

「あいつが研次の顔を焼いたんです。大阪から帰ってきた研次が疲
れて寝込むのを待ち、除光液をかけ、マッチの火を投げたんです」
れい子が歯を鳴らしながら叫んだ。口惜しそうに唇を舐め、「ひど
いったらありやあしない」と涙声になる。

秀夫は、長い指でひきつった頬を乱暴にこすっている。その拍子
に、ぶ厚い肉におおわれたまぶたがめくられて、焦点の定まらない左
目が私の後ろ二メートルばかりを睨んだ。

「浩一、お前が理恵から何を吹き込まれたか知らんが、もうあいつ
のところには帰らねえからな。第一、危なくて帰れるわけもねえだ
ろう。俺には、まだ大仕事が残っている」

「待ってくれ、お前はこの前はなるようにしかならんと、なにもか
もあきらめた口ぶりだった。もう疲れたとも、決着をつけるともい
った筈だ」

「確かにいったさ。その決着をつけるのだ、これから。俺は、俺た
ちの信条に従って決着をつけるのだ。しかしだな、お前みたいな石
頭にはあきれんぜ。俺を何だと思っている。俺を何だと思つて近付
いた。ふん、考えてもみろよ、お前みたいな味方面をして現われる
奴に、俺たちの本心が易々と明かせるか。戦術だよ、セ・ン・ジ・
ユ・ツ、な。敵をあざむくためには、まず味方をあざむけというだ
ろう。これは、イロハだぜ。もつとも、お前なんか、味方だなんて
思つてやしないがな」

私は、なにがなんだかわからなくなつた。あの日の私の出現で、
秀夫が立ち上がれないほどの傷を受けたのではないかと恐れていた
のだった。かつての一応のライバルであった私が現われたことで、
秀夫のプライドが痛められ、ゆがめられて、不用意なことをしでか
すのではないかと心配していたのだった。

「いいか、よく聞け。人間どもはな、醜く肥え太り過ぎている。己
れを万物の霊長とやらに祭り上げ、すべてを支配しようと目論んで
いる。お笑い種だよ。こんなお粗末な話があるか。元はといえは、

たかが猿じゃないか。たかが、猿、だぜ」

そこまでいって、秀夫は少し咳き込んだ。柿色の左頬が朱色に染まり、喉仏がグルルと鳴る。その苦しさを静めるためにか、ウイスキーのボトルをわしづかみにすると、仰向けに喉の奥に流し込んだ。そして、やつと人心地がついたというふうに、顎のあたりまで垂れた拳を手の甲で拭い、今度は私の膝近くのにじり寄ってきた。

「いいか、そんな猿どもが肥え太り、なけなしの脳ミソをはたいてこしらえたのがいまの世の中だ。つまり、てめえ可愛さに、ちよつとばかりずる賢い猿が、そうでない猿どもを踏み倒し、蹴散らしていくためにこしらえた、薄汚ねえ仕組みだ。それがだ、血の滴る蛮刀を抜き身のままぶら下げ、共存共栄なんて間抜けたことをぬかしやがる。汚ねえぜ、全く。のさばればのさばるだけ、てめえの足元が見えなくなつちまつてるのさ。考えてもみろよ、猿どもになにがわかる。一年先のことがわかるか。十年先のことがわかるか。どころか、明日のことだって、なんにもわかつちやいない。万物の霊長が聞いてあきれんぜ。俺はだな、がまんがならねえんだよ。このごまかしに満ちた仕組みが、なにもかもな」

秀夫は、めくれた唇を震わせながら一気に喋る。興奮が突き上げてくるのか、裸の胸が激しく脈打っている。れい子は秀夫のうしろに横膝に座って、時折あばら骨を伝って落ちる秀夫の汗を、黄ばんだタオルで拭いてやる。

私は、秀夫のいうことばに似たことを、学生時代の荒れたキャンパスで、幾度となく聞いた。講義のない教室で、学生大会で、渦巻くデモのなかで、誰もかれもが目を吊り上げてわめいていた。

私の場合は、生来の鈍重な性格のためか、どの派の誘いにも入らず、入れず、はずれ者に等しい学生生活を送ったのであるが、この頃のキャンパスではすっかりこの手の叫びを聞かなくなっている。聞かなくなつたというより、すでに終わつたのだ、と思つていた。それが生きている。あの狂暴だったエネルギーをひきずっている男がまだいたのだ、と改めて秀夫を見る。

「待ってるんだ」

秀夫は、ニヤリと笑つた。

「時が熟するのをな。そうしたら、手始めにこの街を焼き払う。その次は〇市、その次は俺もろともにI市だ」

「やめろ」

私は、思わずこたつ板を叩いていた。一瞬、苦渋に沈んだ生きざまをしかなし得ない自分自身を殴りつけている、そんな錯綜した思いが私の頭をよぎっていった。しかし、私の口からとび出したことばは、真直ぐに秀夫に向かつていく。秀夫のいつていることは、どう割り引いても、やっぱり頭の具合のススんでいる人間のものとし

か思えない。

「バカも休み休みにいえ。なにが、この街を焼き払うだ。なにが、たかが猿だ。お前の両親もいる。お前には、子供だっているんだ」

「ほう、お前らしくない気のきいたセリフだ。こいつは見上げたぜ。だが、お前なんかの唐変木になにがわかる」

「わかるもわからないもない。あたり前のことをいつている」

「ふん、現にお前は一つの間違いをしでかしている。以前にもいつたろう。俺には子供なぞいやしねえ」

「お前の子供は五日間も点滴をしている。いま、会ってきた。死ぬ目にあつてるんだ。お前の名を呼びながらな」

「何度いわせればわかる。あれは俺の子じやない。理恵が、助平野郎の医者との間に産んだ子だ。理恵がいつも通っている精神病院の医者との間にな」

私は冥目した。

これはもう自分の出る幕ではない、と思った。目をつぶると、まだついそこに二十年前の自分と秀夫がいる。二十年という歲月など、ほんのつかの間の間の一またぎにしか過ぎないとも思われるのに、二人の間から流れ去ってしまったものはなんだろう。

「俺はガキなんか産ませねえ。がまんができねえよ。許せねえんだ。俺とそっくりの、俺でない奴が、この薄汚い世の中にいるってことがな。冗談じゃねえよ」

秀夫の野太いしゃがれ声が、耳の端をすり抜けていく。もともと秀夫の声は、こんなにあけすけではなかった。こんなに、目を吊り上げてまくしたてる声ではなかった。

この秀夫と透空と、いったいどこでどうつながるといふのだろう。あの、少なくとも自由律の体をなした透空の句が、このススんでしまった秀夫の頭の、どこから生まれてくるというのだろうか。

それも、この街を焼き払うなどという秀夫のなかのなにが、透空としての呻吟を思い立たせたのであろうか。

「しゃんとしようぜ、しゃんとな」

秀夫がつぶやいた。私が観念したのを見てとったのか、秀夫もまくしたてるのを止めてしまった。

閉ざした私のまぶたの裏で、急に勢いをなくした秀夫がのろのろといざり始める。右の目にはそれとわかる疲れの色がにじみ、裸の肩を力なく落とし、顎を突き出している。あばら骨の浮き出た胸が、荒い息遣いとともにはせわしく上下する。左頬に落ちかかる濡れた髪の毛を、気鬱そうな仕種で二度、三度と掻きあげる。

こうして緩慢な動作に落ちた秀夫の遠景を、すがめに眺めていると、岩に打ち上げられた子鮎のあえぎを見る思いで、いままで気負

い殺気だっていた秀夫が、どこか懐かしくさえ感じられてくる。
「しゃんとせんとな」

泣きそうな声になった。その後、ウツとれい子の声が続いた。
れい子が泣き出したのかと思った。

「なにをしてる」

私は、自分で自分の声に驚いた。れい子の顔が、瞬間ギクツと浮き上がった。

「なんだ、それは」

れい子の腕に、秀夫が細い注射針を突き立てている。れい子の頬が、みる間に蒼白に透けていく。

秀夫は、自分の左腕にも針を刺した。握りしめている左腕のこぶしをゆっくり開きながら、震える親指が、ばかに慎重な仕種で筋肉のなかに押し込んでいく。

「わかるか」

秀夫は、大きく肩で息をついた。ことばが、唾液を混ぜ合わせてこしらえた粘土になり、べたりとたよりなくふやけている。れい子は耳を押さえて畳の上丸まっている。Tシャツの胸が、激しく伸びたり縮んだりする。

「こいよ」

秀夫はフラリと立ち上がって、二、三步壁際によろけた。そのはずみで、こたつの角をイヤというほど蹴とばした。それでも、笑っている。もう一度、今度はふすまによろけかかった。ふすまの下では、れい子が喉を掻きむしりながら黄色いものを吐いている。

「よく見てろ、俊秀の透空さんをな」

秀夫のひよろ長い腕がれい子を抱き上げ、敷きっぱなしの布団に軽々と運んでいく。どこにこんな力がひそんでいたのか、と思うほどの力である。

秀夫は、抱え上げたれい子を、腰の高さから布団に投げ付けた。本人は投げ付けるつもりなどなく、やわらかく下ろしただけのつもりなのかもしれない。だが私には、れい子の体をぬいぐるみよろしく持ち上げ、投げ捨てたときか見えない。

れい子の体が鳴った。薄い布団の上に勢いよくバウンドしたときにギャツと鳴ったのだが、それは苦痛の声ではなかった。その証拠に、はね上がったれい子の体が思いきりしなって、秀夫のあばら骨に吸い付いたのだった。

「猿だぞ、猿」

秀夫は、小躍りしてれい子の胸にむしゃぶりついた。歯と歯が鳴り合う。薄い秀夫の胸板が、れい子のよく弾む胸の上で反り返り、ずり落ちようとしてはすくいとられる。

「ちきしょう」

秀夫の指がれい子のめくれ上がったTシャツをむしりとり、思いきり私の顔めがけて叩きつける。ジーンズもはがして、私の目先をなぎ払う。灰皿の灰がとばされ、傍の洋服箆笥の高さにまで舞上がった。

私は吐き気がした。逃げ出さなければならぬと思った。しびれる腰を浮かし、後ずさりを始める。間合いを見計らって立ち上がるうとした足がたたらを踏み、思わずうしろ手にこたつ板をつかんで板もろともひっくり返った。

「逃げるのか、浩一。猿のくせに、ちきしょう、貴様も薄汚ねえ猿のくせに」

秀夫がうめいた。二人がもつれ合い、布団から転がり出た。勢いのついたれい子の肌がゴムまりとなつて震えて弾み、私の膝元に落ちてきた。

そのゴムまりには、夕闇を溜め込んだ部屋のせいもあるが、私には、理恵に切りつけられたという、確かな傷の跡を見ることはできなかった。

(七)

ダイヤルを回す。少し間を置いて、呼び出しの音が始まる。軽い澄んだリズムである。あまりにも軽く、たよりのない気さえある。が、すぐに出た。

「よかった、帰っていらしたんですか」

「もしもし理恵さん、もしもし」

もう一度ダイヤルを回す。今度はやや重たいベルの音になる。五回、六回、十回、十五回、私は受話器を下ろした。

これで何度目だろう。れい子のアパートを出た昨夜から、幾度となくダイヤルを回してみるのだが、一向につながらない。

小児科医院にも真先に訊いてみた。看護婦の話では、昨日の夕方、つまり私がい子のアパートを訪ねた時間には退院していたのだという。「大丈夫ですよ、すっかり」と、看護婦は私を身内の者とも思ったのか、子供の経過のことまで教えてくれた。

「先生、なにかお急ぎのご用件でも」

私と同じダイヤルを何度も回すものだから、事務長が怪訝そうにいった。

「うん、ちよつと至急連絡をとりたいんだ」

「なんでしたら、ご用件をお取り次ぎいたしましょうか」

「いや、プライベートなことだね」

途端に事務長は不機嫌な顔色になった。プライベートなことでは、

あちこち私用電話をされてはたまらないという、無言の抵抗の色である。これが、老教授に対するときなどは、追従の一つや二つもい

うのだが、私みたいな講師クラスではそうもいかない。
「来週シンポジウムをやるんだが、パネリストの一人が急病だとい

うんでね」
などと、バツの悪さをせい一杯の愛想笑いで切り抜けなければならなくなる。

そのとき、ちょうど私のことばを包み込み、二時限目の始業ベルが鳴り始めた。救われた、と思った。事務長の餌食にならずに済んだという思いと、理恵や秀夫のことを少なくともこれからの九十分は忘れていられる、という思いが半ばだった。

敷石伝いに教室への道を歩く。夏休み間近の校庭は、つつじや夾竹桃の葉が色濃く繁っていて、水銀灯の光にひときわみずみずしく息づいている。売店の前の築山風に盛られた芝生のなかでは、コーラスグループの女子学生たちが、頬をふくらませてポップス調の歌を歌っている。銀行の制服みたいなものを着た娘や、パンツルックの娘もいる。傍らを剣道の胴着を着けた男たちが通りかかり、一人が「キヨミ、明日はな、頼んだぜ」とジョッキを傾ける真似をする。

「みんなで押しかけるからねえ」と、パンツルックの娘が歌をやめて手を振る。

この時期になると、教室の学生の数は百人足らずに減ってしまう。入学式の頃は、五、六百人の学生で噓せかえるほどであるのが、一か月も経つと半分になる。二か月目には、そのまた半分に減る。

初めて教壇に立った年は、そのあまりの減りように、自分の能力の乏しさのせいかと半ば自信を失いかけたのであったが、この傾向は自分の教室だけではないのだと知ると、いくらか落ち着くことができた。

それがこの頃では、この百人足らずにまみえることが喜びにさえなっている。たいていの場合、五十代や六十代の学生が最前列に陣どつていて、一言でも聞き洩らすまいとノートをとる。生半可な詩や句の批評でもしようものなら、それこそ痛烈な質問の矢がとんでくる。

最初、夜間部ということばに、じめじめと暗い、低レベルの教室を想像していた私であったが、私の出身のK大の教室にはなかった迫力を肌身で感じ、どちらをとるかといわれたら、いまは躊躇なく夜間部を選ぶ、と答える。

「放哉が死の床で見つめていたものは何だったのですか」

私が説明し終るのも待たず、スーツを着こんだ正面の学生から質問がとんだ。

私は、二か月前に簡単に触れた自由律を今日の教材に選んだ。前回と同様に、子規、虚子、井泉水などの句を板書しながら、井泉水はなぜ新傾向に転じなければならなかったか、放哉はどのように自由律にかかわっていったかを説いた。

「先生は、『咳をしても一人』について、飄逸な男の姿を表しているといわれましたが、私は違うと思うのです。ここにはなにかの狂気がある。寂しさを通り過ぎた痛みがあると思うのです」

「素晴らしいでしたね。私は、その痛みのさらに向こうを見るのです。痛みの向こうには、透明なものを感じます。あるいは、あきらめとといった方がよいのかもしれませんが。徹底したあきらめ、というべきでしょうか。徹底した、ということばさえも突き抜けてしまった空、とでもいうべきでしょうか。飄逸ということばを、私は決して軽々しいという意味で使ったものではありません」

「透明な、という先生の考えにはついていけません。放哉は、確かに仕事も家も捨てて放浪の道を選びました。しかし、いく先々でやれ金をくれ、米をくれ、酒をくれと泣きついたというではありませんか。一番人間臭い場所にいるのです。それでいて自分は一人だ、孤独だと死に急いでいるふりをして気取っているのです。どこかいびつな、というより狂っているとしたか思えません」

「それはいえませぬ。確かに放哉の生活は好ましいものではないかもしれませんが。実際、島の人々からは厄介者扱いを受けています。酒乱でもありました。でも、彼の句にはこれらを相殺して余りある精神の高まりがあります。ちり、芥のなから抜き出た一種の異才、と私は理解するのです」

そういつている私の脳裏に、ふと秀夫の姿が浮かんできた。どこかで、放哉のイメージに秀夫をダブらせている自分に、苦笑したくなった。「ちり、芥のなから、とは聞き捨てならんことです。ちり、芥とはわれわれのことですか。ちり、芥から抜き出た異才とは、ちよつと納得できません」

別の方向から、いきりたった若い学生の声が返ってくる。

「待ってください。私はなにも、みなさんのことをちりの、芥のといっているんじゃないんです。放哉自身が、ちり、芥の存在であったわけです。まさに、乱調、乱舞を地でいったわけですから、決して誉められたことではありません。でも、考えてごらんください。われわれが、この限られた命を真剣に生きていくとしたら、たちまち暗礁に乗り上げてしまうでしょう。その暗礁にどうかかわり、どう向かっていくかは、それぞれのやり方で違うかもしれません。放哉の場合、まともにぶつかっていったのです。粉々に砕け散った自分の肉片を拾い集めて、またぶつかっていく。しまいにはよれよれに汚れ、疲れて、精神だけがとり残された」

「感傷、全くの感傷です。でたらめもいい加減にしてくれといいたい。放哉は逃げた。逃げて逃げて逃げまくったんだ。でも、すばらしいよ。感心だよ。でたらめもここまでくると尊敬してしまうよ」

「私たち、もつと楽しく生きるべきじゃないかしら。楽しく生きることが、いまの時代に生まれてきたことの努めだと思ふの」

「粉々に砕け散るなんて、嫌です。はっきりいって。だって、死んでしまったら、何にもならないのよ。木端微塵の無だわ。それっきりなのよ。未来永劫、この私たちがいま存在しているということの痕跡さえも残らないわ」

「そういう視点で見ると、むしろ放哉の勇気を讃えてもいいな。これつきりかもしれない自分の身を捨て、なにかをつかもうとした。いや、肉の姿である己れを捨てることができるということ、その向こうにあるかもしれないなにかを拾おうとした」

「向こうになにかがあるというの。そんなこと、信じられるというの。まるでまやかしだわ。ほんの気休めじゃなくって」

「空論ばかりやってても意味ないよ。放哉はずるいよ。どっぷり生活の垢に浸り、垢がこびりつき過ぎて逃げ出した。生活に疲れ果て、逃げ出すよりほかなかったんだ。つまり、意気地なしの、単なる逃亡者に過ぎない。それも、世俗にまみれた意地汚い自殺願望者という」

「放哉の精神は」

はさもうとする私のことばを遮り、前列の数人が立ちあがって議論を始めた。いつもは講義の内にまで入ってこない後列の学生までもが、ときどき野次をとばす。

「つまり、早いとこずらかりたい。エリートであるくせ、精神の破綻者なんだ。早いとこずらかつて、消えてしまいたい。そうすることが、なによりてっとり早い。そんな男に、向こう側もこちら側もあつたものか」

「第一、女々しいつたらないね。恐いんだよ、本当は。人一倍自負心だけは強いものだから、崖っ縁によじのぼってはみたもの、おめおめと降りてくるわけにはいかない。しかし、潔くパツと飛び降りる勇氣もない。そのうち、腹は減る。足や腰は萎え、痛み出す。といって、崖の下を通りかかる人に注目されない自分には我慢できない。黙っていてもいいものを、自分を主張しなければならぬ。けれど、崖の下を通る人間は日々を懸命に生きてるんだ。崖の上の駄々っ子に、いつまでもかかわっている暇はないんだよ」

「崖の下を通る人間を待ち、見つけては、自分はいままさに潔くジャンプするんだからと吹聴し、それが、いつときの食料や酒を無心するためのタネになる、というわけだ」

「違う。彼は、確かなものを見透かしている。やがて至ろうとする

向こう岸を確かに見ることで、誰もがいつか必ず通らねばならないことを、一人の語り部として語ろうとしている。想像を絶する峡谷を渡り、燃え盛る火の海をくぐ抜け、はじめて至ることになるその向こう岸のなんたるかをね。『咳をしても一人』は、ものを見通せる人間にしか与えられない、凍りつくほどの孤独の、せっぱつまつた独白なんだ」

「仰々しい解釈は止めてくれ。文字どおり、ただ一人咳をしている男を映像として見ればいい。その男の影になにを読みとろうと、読みとるまいと勝手だ」

一週間前に翌週のプリントを配布するという私の授業方法に、みんなが慣れてくれたのか、この教室では、結構下読みをして授業に臨んでくれる。私の喋りだけでは時間がもたないこともあり、プリントに助けを借りているというのが本音であるが、こんなに教室がざわつくほどの効果をもたらすとは考えなかった。

放哉は、もともと人一倍栄達を願っていた。そのための素地も十分あった。しかし、己れの直情のままには運ばない。人の海に漂流し、大波に吞まれてしまいそうな身を引き上げようと、無我夢中で手を伸ばした先に、投げられたブイに紛う酒があった。

放哉の漂流は、酒と、自堕落と、怯えと、猜疑と、逃げと、あきらめとがないまぜとなり、奇妙な澄明さを紡ぎ出していく結果となるのだが、そこには、どこまで逃れようとしても人肌の温もりを忘れ切ることのできない、放哉の決定的な弱さがあつたと考える。弱さを、これほど赤裸々にせずには生きることができなかったということが、私たち生身の人間を安心させるのだ。

と、授業をこういう道筋で運ぼうと意図しているのだが、教室の空気は私の憶測を超え、はるか高みで渦を巻いている。

いま私は、再び秀夫を放哉に重ね合わせている自分に気付いている。

情欲にふくらんだ柿色の頬をひきつらせ、「猿だ、猿のくせに」と叫んでいた秀夫の声が、遠い空から、透き通った楔となつて落ちてくる。その声に打たれた私は、教壇もろとも引き沈められ、ざわめき止まない海を放心のままに眺めている。

(八)

腰の痛みもすっかりとれた。一度も医者には見せずじまいだった。「現代文芸の展望」には、高井正一の生い立ちから少年時代までをまとめ、なんとか一回分を送りつけた。今後の予定では、高井の学

生時代、恋愛、挫折、「ものたち」の時代へと書き継いでいくことにしている。K書房の店員がとりそろえてくれた高井の七巻にのぼる全詩集や、書簡類のコピーも、ほぼ手元に届いている。

「加奈子、昼の残りのサンドイッチどうした」

「まあ、たつたいま食べたばかりじゃない。すごい食欲ね。せっかくのイルド・フランセが入らなくなっちゃうわよ」

妻は、三十分も前から鏡の前を動かない。クリームをのばし、パフではたき、口紅を丹念に引いている。

「嫌んなっちゃう。ここんどこ、ちよっとしみが出てるみたい」

とつぶやきながら、片頬を指の先で突つついて、自分の顔に笑いかけてみたりする。

子供を産まない妻の肌は、結婚した頃と殆ど変わらないほどなめらかである。腰の線も崩れていない。胸もヒップも、形よく盛り上がっている。

昨夜、私は久しぶりに妻を抱いた。腰の痛みを口実に、長い間妻の誘いを断ってきたのだが。というより実際は、秀夫とれい子とのことのとあと、全くその気を失っていたのであるが、昨夜は体の芯から突き上げてくる劣情があった。

私は、書斎にコーヒーを運んできた妻のネグリジェをいきなり引きずり下ろしていた。机の端に置いたコーヒーが音をたてて皿にこぼれ、あやうくじゆうたんにまでひっくり返りそうになった。

妻の体はしなやかだった。斜めにも、うしろにも、自由自在に伸びた。指で触れると、一点に収斂する熱い渦の中心が、したたかに私を呑み込もうとするのだった。妻の髪は、床にまで重ねた全集やノートの間で、乱れ、波うち、額や頬にはりついた。胸から首筋にかけては、私の唾液で濡れ、光った。

「ねえ、いいでしょ」

「聞いているの」

妻は、鏡のなかの私に向かって、上目づかいに話しかけてくる。

「ああ、イルド・フランセ」

「違う、ほら、もううわの空なんだから」

小さく舌を鳴らした。でも、不機嫌そうではない。

「ドレスなの。お友だちの発表会に着るのよ。ほら、仏文の出で薬局に嫁いだ町田って娘知ってるでしょう。彼女、ピアノ教室をやつててね、月末に初めてのオリジナルコンサートを市民会館でやるのよ。招待状ももらったんだし、いかないわけにはいかないのよ」

「ふうん、君にはあまり関係なさそうだけどね」

「そんなことはないわよ。彼女とは専攻は違うけど、入学以来のライバルだったものね。ちよっと口惜しいけど、いかなかったらいか

なかったで余計みじめになるじゃない」

女のライバルとはそんなものなのか、とおかしくなってしまう。

「夏のドレス、ないことはないけど、父のときはもう型が古いでしよう。いいのがあるのよ。ローリーヌというお店で目星をつけてたの」

父のときというのは、一年前、義父が還暦の祝いを兼ねて出版記念パーティーをやったときのこと、このときも妻は、私のサラリーの二分分はするドレスを買っている。

今更だめだといっても、欲しいものは手に入れるに決まっている。もともと、私の収入だけではやりくりできず、妻はことある毎に実家に無心に行くのだ。

「だって、あなたに望みがあるならまだしも、私の楽しみといったら着ることぐらいじゃない。あなたの実家の世話になっているわけでもないし、関係ないでしょ」

と、私がとがめた口ぶりをみせると、決まってこんなセリフが返ってくる。

「始めようかなあ、私も。英会話教室ぐらいできないことはないわね」

ティッシュペーパーで化粧のあとをはたいて、それを無造作にちりかごに放った。それでもまだ唇をとがらしたりすぼめたりして、鏡の前を動かない。

「どうだ、それより、遅くなるんじゃないのか」

腕時計を覗き込みながら私がいうと、そうね、と妻はあっさり立ち上がった。

「めったにないことだものね。あなたと食事に出かけるなんて、何か月ぶりかしら」

もう一度鏡のなかの顔を確認、頷くと、クルリと振り向き腕をからめてきた。昨夜のことがまだ効いているのかもしれない、と私はなにかうしろめたい気持ちに、耳のあたりがくすぐったい。

笑いながら右肘にぶら下がった妻に、引きずられる恰好で玄関に出た。スリッパを脱ぎ、靴をはこうと片手を電話台で支え、靴べらを手にした。

そのとき、ふいに私の指の間から、乾いたベルの音が鳴り始めた。

「浩一かあ、俺だ、俺だ」

秀夫だった。

「いまなあ、火の山というパーキングだ。海が見えるぞ。真青だ。吸い込まれそうな青さだ。船が走っている」

真青な海を思わせる秀夫の声である。

「白い船だぞ。三本もマストが立っている。手を振っている。あい

つはアメリカだ。頭のところにそう書いてある。あいつは、いまから太平洋に出るんだ。違うないぞ。ほら、真直ぐに出ていく。波を蹴散らして、青い波を蹴散らしてな」

「秀夫、秀夫、何をしている」

私は、秀夫が青い淵を前に立ち、いまにも身を投げようとして揺れている。そんな思いにとらわれ、自分も思わず身をのり出す格好になる。

「俺もなあ、アメリカいくぞ。いまな、いまはつきり決めたんだ。なに、思いつきなんかじゃないぞ。何度も何度も考えてた。西海岸だ。シスコかロスだぜ。ハイウェイをぶっとぼすんだ。砂煙、あげてよう。アハハ、俺にもこれぐらいのこと許されていいよな。な、いいよな」

秀夫が鼻をすすり上げる気配になる。

「どうして、こんな簡単なことに気が付かなかったんだ。なんで気が付かなかったのかよう。なんで道草食ったのかよう。ドジな話だよ、全く。俺あ、こいつはとっくの昔に決めてたんだ。なあ、お前も知ってるだろう。そうだったろう」

「そうだった。そういつてたよ。お前ならびったりだと思ってた」
二十年前の秀夫は、英米語学科に進み、卒業までに一、二年はアメリカに留学して、生きた英会話や文化を勉強するのだといっていた。確か、弁論大会のときもそんな内容だったし、図書館の裏の日溜まりで、頬をふくらませながら喋っていたこともアメリカのことだった。

「そうだろう、なあ、間違いないよな。アハハア、俺は夢を見た。違う、忘れてたんだ。今度こそ、絶対にアメリカいくぞ。みんなでああ、みんなしてさあ」

秀夫のしゃがれ声が、急に鼻の奥で詰まった。

「みんな、みんなって誰だ」

「もう一度会ってくれないか。もう二時間。あと二時間もあれば戻るからさあ。ミレーがいいな。あそこで待っててくれないか。本当に、お前に頼みたいことがあるんだ。これからすつとぼして帰る。五時だ、五時に間違いないミレーだぞ」

秀夫のしゃがれ声は、車の鋭い発進音にかき消されてそこで途切れた。まだ一言、二言なにかいったようだったが、私には聞きとれなかった。

「誰なの」

通話の切れた音のする受話器をつかんで立ったままの私に、車庫に出てエンジンをかけてきたのか、妻がドアを開け放ったままで訊いた。

「済まないけど、食事はまたにしてくれないか」

「ええつ、どうしたの急に」

妻は、明らかに不機嫌な表情になった。

「新聞社から五時にきて欲しいというんだ。この前のレポートのことで、ちよつと食い違いがあるらしい」

「なにも、今日じゃなくたっていいでしょう」

「それが、明日の夕刊に載せるんで、どうしても今日じゃないとだめだっていうんだ」

高井正一のレポートが、明日の夕刊に掲載されることは間違いないかった。とつきにこんないい逃れを思い付いたにしては符合のいくことだ、と思いがけず自分で納得する。というより、これまでの私の生き方のなから自然に身に付けた、私なりの防衛術である。

「今日はどうしてもだめだっていえば、断れないこともないでしょうに」

「そういったんだ。でも、向こうも低姿勢だったし」

秀夫との約束までにはまだ二時間ある。急げば、妻との約束も果たせないことはない。先に食事を済まし、ショッピングの相手をキヤンセルしてミレーに向かえば、なんとか間に合うかもしれない。

しかし、秀夫はその時間も車を走らせているのだ。私に会うために、大阪からの行程の残りの十分の一ほどを、フルスピードでぶつとぼしている。私だけがのんびりと食事をしているなど、そんな気にはとてもなれない。

「私のことなんかどうでもいいというのね。時間を先にずらすとか、要点を答えるとか、いくらも方法はあるというのに、あなたって、いつもこうなんだから。原稿を書くにしても、父には記事の食い違いとか、訂正とかは一度もなかったわよ」

とうとう妻は、また義父との対比をもち出した。これをいうときの妻は、小憎らしいカラスにみえてくる。それがどれだけの毒を含んだことばかを知ってか知らないでか、最後には必ずこのことばを投げつける。私だって、なにも好き好んで不要領なのではない。

「うるさい、俺は俺だ。俺がなにをしようと思手だろう。どうせお前たちは、俺のすることはみんな気にいらないんだ」

と、喉元にまで突き上げてきたことばを、かろうじて呑み込んだ。見境もなくはり倒してしまいたい衝動を、腹にねじ込んだ。

いまは、なにより、ミレーに駆け付ける手だてを優先しなければならぬ。

「ぼくの力が及ばないんだ。お義父さんと比べられたんじやかなわないよ。頼むよ、この次には必ず約束は果たすからさ」

情けない声になる。自分に無関係の表皮だけの人形が、勝手に口を動かす、遠い声で喋っている。

「知らないわ。私は一人ででも出かけますからね。ドレスは、今日

じゃないと絶対間に合わないんだから」
「素晴らしい捨てるよ、妻は憤然とドアを閉め、足音を蹴たてて出ていった。」

あれから、もう一か月になる。いや、まだ一か月しか経っていない。私は、「M・H」にセブンスターの煙を吹きかけながら、そう考える。

怠惰にはあるが、妻との依怙地な関係を除けば、まず安穏な日を過ごしていた私の前に、突然秀夫が現われた。それは、二十年という歳月がもたらす変貌の、悴をはるかに超えた姿で現われた。

いや、秀夫が現われた、というのは当たっていない。私の屈折した功名心が、秀夫を呼んだ、という方が適切である。

秀夫は、私の下心を一目で見破った。俊秀などという見え透いたことばを、一撃で弾き返してきた。秀夫から見れば、私のしがみついている大学の講師というポストなど、退屈極まる隠微な代物に過ぎないのかもしれない。まして、私の手によって世に出るなど、お門違いの笑止、というものであつたらう。

その秀夫の頭の具合がススんでいる、と理恵はいった。そうかもしれない、と思う。もともと、誰よりも鋭角に走る術を心得ていた脳の細胞が、激しいショックを得たため、鋭角の度をさらに増しつつあるのかもしれない。

何枚ものカミソリの刃を水底に沈めたとても形容すべき石畳の句や、鳩の目の句などを詠む者の頭が、私みたいな凡庸の頭の構造である筈がない。

あれからしばらく経って、れい子のアパートを訪ねてみた。「出ていったんです」と素っ気なくいうれい子は、エンゼルの頃とはまるで別人かと思えるほどに肉が落ち、目が血走っていた。

「薬、冗談でしょ。栄養剤ですよ。神経をすり減らす仕事で疲れ果てている研次のために、私が病院の友だちからいつも頒けてもらう栄養剤です。間違いありません。本当に」

れい子は、どこかもつれる舌でいった。
「あいつのところには行ってません。だって、あいつ、研次を殺そうとしてるんです。狂ってるんですよ。ここに帰ってくるわけないでしょう。あれつきりです。たったのあれつきりです。こんなことになるなんて、ひどいでしょう、私たち。それにしても、研次がかわいそうです。いつも、追われているんです。追いつめられているんです。だから、自分、ここに帰ってくることはありません。私も知らないのです。どこへとも告げずに、出ていったんです。わかつたら、教えてください。もし研次の居場所がわかったら、絶対教えてください」

まなじりが裂けるほどに目を見開き、私を打ち据えるほどの激しいことばを吐いていたかと思うと、れい子はずるずると玄関の板の間に崩れ落ち、身悶えして泣き出した。

理恵には何度も連絡をとろうとするのだが、行方がわからない。なにを話そうというのでもないが、いま連絡をしないことにはなんだかとり返しのつかないことになりそうで、落ち着かない。

小児科医院を出てから、どこへいったというのだろう。点滴を終え、一時的に体力をとり戻したであろう子供と一緒に、かかりつけの医院の守備範囲から離れ、いったいなにをしているというのだろう。あれから一か月。あの小児科医院にも、城北区のアパートにも現われた形跡はない。

秀夫の後を訪ね、心当たりを渡り歩いているのだろうか。T運送の管理事務所や、ターミナルの辺りや、夜の街を、手当たり次第に歩いているのだろうか。

ひよつとして、闇夜に目を光らせ、カバンには果物ナイフをしればせ、と考えたところで、自分のおぞましい思い付きに愕然として、私はあわててその思いを振り切った。

私の内に、理恵ははたして闘士であったのだろうか、という疑問が根深くある。病院の壁の色に染まりそうなほどに青白い、あの細身の体躯のいったいどこに、血みどろの闘いを、絶えず繰り広げてきたA派の構成員としての面影を見い出せばいいのだろうか。

もし、A派の構成員であったとして、理恵のどこに、目的のためには血を流すことなど厭わないという、狂暴な思想が潜んでいたのだったろう。

キャンパスを席卷した夥しいヘルメットの下に、荒々しく光る目。すさまじい形相の目の群れ。血の色をにじませた目の群れ。

私は、バリケードや、デモの列の傍を通る度に、彼らの群れが獐猛な爬虫類の目で私を迫っているのではないかという思いに捕らわれ、首を竦めて急ぎ足で走り去ってきたのだった。結局、私が一度も踏み込むことのできなかつた巨大な空間、広大な時間のうちに、彼らは棲み、私にとつては異次の空間をしたたかに生きてきたのだ。それはそれでいい。しかし、私は、小児科医院での切迫した理恵の訴えを、捨ててはおけない気がして仕方がないのである。かみしめた唇の色が、紫色から蠟の色に変わり、いまにも溶け出してしまふのではないかと思われたあするとき、私はうずき始めた腰の痛みに気持を奪われていた。

「あの人は、自分の子供のこともわからないほどにススんでいるのです」

そういったときの理恵の表情には、暗い翳りが一面に影をふいて

いた。

秀夫は、理恵のことを、自分を警察に突き出そうとする裏切り者で、執拗に命を狙おうとしている刺客だという。理恵の方こそ狂つており、秀夫の顔面を焼き、もろともに粉碎しようと思つて狙っている公安のスパイなのだといった。

ガラス窓の「M・H」は、こころもち右下がりの格好のまま、一か月前と変わらないころもとなさで宙に浮かんでいる。その字をなぞってみよう、と指を出しかけたが、止めた。「M・H」が「M・H」でなくなってしまう、と思った。

人を待つ気持はどうにも狂おしいものであるが、この「M・H」にはどこか心の底が抜けた透明さがある。口笛でも吹きたくなくなってくる、涼しさがある。

秀夫は現われない。約束の五時は、三十分前に過ぎた。以前のこともある。私は、もう一杯コーヒを注文した。「ずい分お待ちになりますねえ」と顔なじみになった娘が、水を替えてくれる。

今日は帰らなくていい。秀夫が来たら、今夜は秀夫よりも先に酔い潰れてやろう。そう思いながら、私は焼けついた国道のアスファルトの色をじつと見ている。

(九)

昼近くになつても妻は起き出さない。昨夜は十二時を過ぎて帰つてきた。自分の運転する車で帰ってきたのだから、それほど飲んだわけではないだろうが、居間の玉すだれを跳らせて入ってきたときの上気した顔は、かなり酔っているに違いなかった。ローレヌという店の包みやデパートの包みをソファに放り出すと、真直にシャワー室にとび込み、そのままベッドにもぐり込んだ。

チャイムが鳴った。もう一度鳴る。しばらく間をおいて、今度はノックの音だ。

「加奈子、加奈子」

声をひそめて妻を呼ぶ。

「知らない」

妻は、一度まぶしそうに薄目を開いたが、すぐに掛けタオルを頭からひきかぶつて、壁の方を向いてしまった。それっきり動かない。枕の下敷きになりシーツにこぼれた髪が、小さな毛玉をつくっている。私は、妻のベッドとの距離の隔たりを、はかり難い思いで眺めている。

ノックの音は続けて三度鳴った。が、どうやらあきらめてしまつたらしい。元の静けさに戻った。というより、いったん破られかけ

た部屋の空気が、以前よりもっと澱んだ空気に包まれ、底知れず落ち沈んでいく。

私の勤務時間は、一時限目の始まる午後五時四十分からだから、あわててベッドを出ることはない。しかしいつも、遅くとも九時までは起きて書齋にこもる。昼食までの三時間を、郷里が生んだ詩人、三村古葉の研究にあてることにしている。

「そんな無名に近い詩人の研究なんかして、いったいどうするの。それだからあなたは、いつまで経っても講師どまりなのよ」

妻がいうとおり、古葉はすでに忘れられてしまった詩人の一人である。

それに、高井正一の二回目のレポートもある。段ボール箱一杯に詰まった、高井の資料も読まねばならない。

頭がしびれている。体が浮くようであまり力が入らない。喉がいがらっぽい。額を巻き、しめつけてくる熱っぽさがある。

苛立ちながら妻の帰りを待った、昨夜の自分の姿が思い出される。蒸し暑かった。ロッキングチェアにあぐらをかき、ウイスキーを生そのまま飲んだ。セブンスターを二箱吸った。ロッキングチェアは、きしみ音をたてながら、私と、うしろ側のもう一人の私とを揺り分け、交互にのせて、水の底をさ迷った。

うしろ側の私が、お前は決して本音をさらけ出すことのない、肥え太った要領のいい猿だ、と叫ぶのに耳をふさぎ、私は、そのたびにセブンスターを吸い、焼けつくウイスキーをあおった。

結局、八時まで待っても、秀夫はミレーに現われなかった。気が変わったのだ、とは思わなかった。あの火の山からの電話は、敵をあざむくための戦術である「イロハ」だなどは、思えなかった。

それより、もうアメリカに向かっているとび発ったのではないかと思った。秀夫ならやりかねない。そんな唐突の方がよく似合う。左頬をルームライトに火照らせながら、いま頃はもう太平洋の上空をフルスピードで翔けているのだ。

「浩一、お前みたいない奴には、やっぱりつき合ってられねえよ」

と、どこからか秀夫がささやいているのではないかという気がして、ミレーを出たのだった。

階段を下りて居間のソファアに座る。長椅子には、妻が放り出した包みが、昨夜と同じ位置に転がっている。ロレーヌの包みは、なにか硬いものにもぶつけたのか、箱の角が一か所だけつぶれている。

ガラステーブルの上には、セブンスターの箱がある。ライターと

灰皿、ボトルが一本、それに底広のコップもある。コップにはウイスキーが五ミリばかり残っていて、ふやけた臭いを天井にまで這わせている。まだ封を切ったばかりの形をしているセブンスターの箱を振ってみる。乾いた音をたてて、二本がとび出した。一本に火を点け、灰皿の山を突き崩す。

カーテンを開く。狭い庭の斜め上から、白濁した光の束が、滝と成って落ちてくる。たちまちその激しい水流にうたれ、私は背骨まで濡れ通ってしまう。

サッシ戸も思いきり開く。部屋中の澱んだものを、なにもかも洗い出してしまいたい衝動にかられる。じゅうたんまでも放り出したくなる。私の体も、いっそのこと表皮と内蔵をひっくり返しにして、太陽の下にさらしてみたい。そんな不快が、細胞のすみずみにまで折れ込んでいく。

食欲はない。水道の音を聞いただけで、胸がむかつく。食物など、こもりんざい目の前から消えてなくなればいい、と昨日の妻との約束のこともあり、ヒステリックな思いになる。

見たくもないのに、テレビのスイッチを入れた。入れてすぐに消すつもりだった。ふいに、激しい音量が箱からとび出してきた。正午前のローカルニュースをやっている。

「Y組の事務所に拳銃をもった三人組が乱入し、Y組幹部二人を射殺、一人に重傷を負わせ」

と組の事務所を映し、あとに射殺された幹部を写真入りで報じている。四十二歳と三十八歳。三十八歳は私と同じ年齢だし、四十二歳というのは男の厄年なのだろうか、よく死ぬ。ろくでもないニュースだ、と私はスイッチに手をかけた。

そのとき画面が流れて、縦に長く伸びる帯状のものを映し出した。白く長く伸びる帯。それが自動車道であるとわかるまでには、しばらく時間がかった。

「昨日午後四時頃発生した衝突事故で亡くなった方のうち、身元のわからなかったお二人の方の名前が判明しました。F市城北区の無職、中島範子さん二十八歳と、長男の順一ちゃん二歳のお二人です。なお、事故車を運転していた北村秀夫は」

いきなり背筋に水が走った。なにかの塊がジャンプして、口のかにとび込んできた。音という音がいつせいに立ち上がり、フラッシュよろしく弾けたかと思うと、それっきり聞こえなくなった。

吸い込んだばかりのセブンスターの煙が、針となって胸を刺す。一歩も動けなくなるのではないか、と思った。足を踏み出せば、たちまち均衡を失って、床に叩きつけられてしまいそうだ。胃のあたりが二重にも三重にも収縮を始めたようで、腹の底から吐き気とともに酸っぱいものがせり上がってくる。

音のないテレビの画面は、運転席を空に突き出して止まったトラックの絵のままで、動かない。秀夫の写真も、女と子供の写真も出てこない。

そんな筈はない。いま頃、秀夫はサンフランシスコあたりにでも着いている頃だ。もしかしたら、もうハイウェイをぶつとばしている頃かもしれない。

私は、這う思いで郵便受にたどり着いた。朝刊と昨夜の夕刊が一緒に入っている。ダイレクトメールの間に大学からの薄い封筒が一通、それに箱の内側に押し曲げられた格好で、Sも入っている。それらの束を抱えて玄関まで戻ると、私はそのまましゃがみ込んでしまった。

急いで朝刊を繰る。色刷りの広告類が足元に落ちる。

〈連続爆破事件容疑者北村激突焼死〉

というかなり派手な見出しが、右上にある。

へ十五日午後四時すぎ、九州自動車道のKインター付近の下り線で、十五年前の都内の連続爆破事件の容疑者、北村秀夫（三八）運転の大型トラックが、故障のため道路端に停車していたF市東区箱田七丁目、土木業小山寿さん（四五）のダンプカーに追突、北村のトラックははずみで中央分離帯に乗り上げ、炎上した。この事故で、北村が運転席にとり残され焼死。道路にふり落とされた同乗の二人も病院に運ばれる途中、やけどと全身打撲のため死亡した。同乗の二人のうち、一人は二十五歳から四十歳の女性、もう一人は二、三歳の男児で、身元はわかっていない。小山さんは、電話をかけようとして車を離れていたため無事。

なお北村は、連続四件にわたり発生した都内の爆破事件の容疑者として、警視庁から全国に指名手配されており、十五年にわたって坂田稔、橋口隆、木下研次などと名を替え、各地のアジトに潜伏していたものとみられる。現場はゆるやかな右カーブ、付近にブレーキをかけた跡がないことや、数キロにわたって蛇行を繰り返していたという後続運転手の証言などから、北村の居眠り運転ではないかとみて調べている。

連続爆破事件の容疑者、とある。すると、秀夫のいていたことは間違いではなかった。

追われている、なるようになる、といっていたことは本当だった。だとすると、この街を焼き払うというのも、子供は俺の子ではないというのも、理恵は狂っているというのも本当だった、ということになってしまふ。

ということは、あの人は追われているかと思っている、自分で除光液をふりかけライターで火を点けた、という理恵のことばが、空し

いひびきを帯びてくる。

それにしても、同乗の中島範子と長男の順一とは誰のことだろう。やっぱり、木下理恵とあの子供のことであろうか。そうだとすると、理恵はどういう具合に、再び秀夫と接近したのだろうか。「秀夫の命を脅かしている筈」の理恵が、どのようにして秀夫との連絡の糸をたぐり寄せたのであろう。

それとも、れい子の元を去ったあとの、違うアジトの住人なのであろうか。あるいは、北村秀夫ではない、木下研次でもない、坂田稔だとか橋口隆だとか名乗って近付いた、ただのゆきずりの婦人と子供なのであろうか。

事故の原因は秀夫の居眠り運転ではないか、とある。私の耳の奥には、事故のほんの一時前にかけてよこした秀夫の、生々しい声が残っている。あのいく分興奮して思い詰めた声の秀夫が、わずか一時間ほどの間に、居眠りを始めるとは信じられない。秀夫は、アメリカに発つ、といったのだ。二十年前に、俺は外交官になるといったときに聞いた、奮い立ちそうなあの明るい声でいったのだ。

その秀夫は、F市まであと二十キロ足らずというところまで来て、炎上した。かつて、左頬に炎を浴びたと同様に、今度も火のなかを突き抜けようとしたのだろうか。左頬ばかりでなく、右頬も完全につぶしたうえで、アメリカへの新しい出発を試みようとしたのであろうか。

秀夫は、私に頼みたいことがあるといった。私は、秀夫のいうことなら、今度こそなんでも聞きとどけてやりたいと思った。それが、二十年の空白を勝手にたぐり寄せてしまった私の、唯一の代償であり、義務であると思った。

しかし、考えてみれば、私にできるながあっただろう。頼みたことというのは、少なくとも透空を世に出すなどという、偽善めいたことではなかった筈である。

わたしは、広告と一緒に足元に落ちた束のなかからSをとり上げた。あいかわらず薄い冊子を、袋から指先でつまんで出した。新しいインクの匂いが、甘く鼻をくすぐる。

顔がない 割れた鏡のうちにもそとにも

透空の句は、この一句だけである。それも、最後尾に申し訳みたいに載せられている。この扱いには不満である。確かに、気負いが勝っているかもしれない。観念に流れているかもしれない。しかし、じっと見詰めていると、私にはこの句のうしろに、まさしく透空、いや秀夫を見ることができると。「猿だ、猿のくせに」と、焼けた

だれた左頬をふくらませて叫んでいた秀夫が、いきなり私を殴りつけてくる。その荒い息づかいが、すぐ鼻の先に迫ってくる。

私は、とうとう秀夫と透空を結びつけていたものがなんであるかを、聞かずにしまった。なにが秀夫を透空への思いに駆りたてたのか。アジトを点々としなければならぬ容疑者である筈の秀夫が、わずか三百人の会員数でしかないとはいへ、全国誌であるSに、どうして投句を始める気になったのか。そして、その透空である秀夫が、最後の一瞬になぜ私とつながらなければならなかったのか。

私は、この偶然を、ほぞをかみたいほど口惜しいと思う。なぜなら、かつての一応のライバルであった私が透空の前に現われ、立ちふさがったことで、それまでの透空の、いや秀夫の緊張の糸が切れ、萎え、しぼんで、落ちていったのであるのかもしれないのだから。「なにしてるのよ、いったい。そんな薄暗いところに座り込んで。あーあ、ただでさえ気が滅入ってしまうというのに」

寝やつれた妻が、ネグリジェの裾を乱して下りてきた。

(了)